

ISSN 2758-1160

復興農学会誌

Journal of Resilience Agriculture and Sciences

第6巻 第2号 2026年 7月



復興農学会

復興農学会誌

第6巻 第2号 (2026年7月)

巻頭言

災害の時代に問われる復興農学の使命 — Journal of Resilience Agriculture and Sciences に込めた思い —

溝口 勝 1

現場からの報告

飯舘村『広報いいたて』から復興期の健康を読み解く — ナレッジグラフ構築の試行

杉野 弘明 2

田んぼがくれた第二の青春 — 退職教授のいいたて稲作奮闘記 —

溝口 勝 9

第5回 復興農学研究会：講演要旨集

15

その他

復興農学会会則

39

復興農学会_幹事・監事選考要領_学会賞規程

41

投稿規定集

43

復興農学会 役員名簿

54

Journal of Resilience Agriculture and Sciences

Vol.6 No.2 July 2026

Introduction

The Mission of Resilience Agriculture in an Age of Disasters: The Vision and Aspirations Behind the *Journal of Resilience Agriculture and Sciences*

Masaru MIZOGUCHI 1

Reports from Fields

Reading Health in Post-Disaster Recovery through Koho Iitate: A Pilot Knowledge Graph

Hiroaki SUGINO 2

A Second Youth Gifted by the Rice Fields – A Retired Professor’s Account of His Struggles in Rice Farming

Masaru MIZOGUCHI 9

5th Annual Meeting of the Society of Resilience Agriculture: Abstracts

15

Others

The Regulations of the Society of Resilience Agriculture

39

Secretariat and auditor selection and guidelines academic awards regulations

41

Submission rules for the Journal of Resilience Agriculture and Sciences

43

List of officers of the Society of Resilience Agriculture

54

Journal of Resilience Agriculture and Sciences Published by Society of Resilience Agriculture
1, Kanayagawa, Fukushima-city, Fukushima, 960-1296 Japan

災害の時代に問われる復興農学の使命

— Journal of Resilience Agriculture and Sciences に込めた思い —

溝口 勝¹

Masaru MIZOGUCHI¹

このたび熊本県を震源とする地震により被災された皆様に、心よりお見舞い申し上げます。また、お亡くなりになられた方々に深く哀悼の意を表するとともに、一日も早い復旧・復興をお祈り申し上げます。



本学会は昨年12月、2016年に発生した熊本地震からの復興を学ぶため、熊本県で現地見学会を開催しました。現地では、震災の記憶を風化させることなく農業や地域社会の再生に取り組む姿に学び、復興とは単なる施設や農地の復旧ではなく、人々の暮らしや地域の営みを再生する営みであることを実感しました。その地が再び大きな地震に見舞われたことに、会員一同深い衝撃を受けています。復興とは一度成し遂げれば終わるものではなく、自然と共生しながら絶えず備え、学び続ける営みであることを改めて認識させられました。

鴨長明は『方丈記』の冒頭で、「ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず」と記しました。800年余りを経た現代においても、私たちは地震や豪雨などの自然災害に加え、気候変動や世界各地で続く紛争、人口減少や食料安全保障など、多くの課題に直面しています。このような時代だからこそ、復興を「元に戻すこと」と捉えるだけでは十分ではなく、困難を未来への力へと変えていく視点が求められています。

私は、復興の本質は「レジリエンス」にあると考えています。レジリエンスとは単なる回復力ではありません。困難なことがあった後に、もう一度幸せになる能力です。それは災害前の状態へ戻るのではなく、経験を糧として、人も地域もより豊かで持続可能な姿へ成長していくことを意味します。

すなわち、復興農学 (Resilience Agriculture) とは、「困難なことがあった後に、もう一度幸せになる能力を科学し、育み、社会へ実装する学問である」と定義します。そして、この「復興農学 (Resilience Agriculture)」を新たな学術概念として国内外へ発信していきたいと考えています。

本学会誌の英文誌名を Journal of Resilience Agriculture and Sciences としたのも、この理念を誌名そのものに表したいと考えたからです。ここでいう Resilience Agriculture は、単に「災害に強い農業」を意味するものではありません。災害や社会的困難を乗り越え、人と地域が再び幸せを実感できる社会を創造するための復興農学を表しています。

一方、「Sciences」を複数形としたのは、復興は農学だけで実現できるものではなく、工学、環境科学、情報科学、社会科学、人文学など、多様な学問が連携して初めて実現できるとの考えによるものです。復興農学は、こうした学際的連携によって社会課題の解決を目指す実践科学でもあります。そして復興農学を多様な知と現場を結ぶ新たな学際的実践知として、さらに発展させていきたいと考えています。

東日本大震災から15年が経過しました。福島復興は新たな段階へ進んでいます。しかし、熊本で再び発生した地震が示すように、災害は場所や形を変えながら繰り返されます。だからこそ、復興農学会の使命は過去の災害を記録することだけではありません。未来の災害に備え、人々が困難を乗り越え、再び幸せを実感できる地域社会を築くための知を創造し、社会へ還元することにあります。福島で培われた経験は、日本のみならず世界の災害復興にも貢献できる普遍的な財産です。

災害は避けることができません。しかし、その後の未来は私たち自身の手で創ることができます。本誌 Journal of Resilience Agriculture and Sciences が、その理念を福島から日本、そして世界へ発信し、研究者、実務者、行政、地域住民を結ぶ知のプラットフォームとして発展し、復興農学の理念を世界へ広げていくことを心より願っています。

¹ 東京大学大学院農学生命科学研究科

¹ Graduate School of Agricultural and Life Sciences, The University of Tokyo

■現場からの報告

飯舘村『広報いいたて』から復興期の健康を読み解く

ナレッジグラフ構築の試行

Reading Health in Post-Disaster Recovery through Koho Iitate: A Pilot Knowledge Graph

杉野 弘明^{1*}Hiroaki SUGINO^{1*}

要旨：本稿では、福島県飯舘村の公式広報誌『広報いいたて』を対象に、復興過程における健康・福祉に関する広報誌上の記述をナレッジグラフとして構造化と理解を目指した試行について報告する。本試行の着想は、2025年度に山口大学学生と共に著者が参加した「福島復興知フィールド学習」において、学生が同誌を現地資料として参照した経験に端を発する。『広報いいたて』は、村が運営するウェブサイト上に公開されており、PDF データとして記述（テキスト）データの良質な公開アーカイブとなっている。この度の試行においては、公開されているデータの中から、特に健康・福祉関連ページに着目し、データの抽出を行い、避難期、帰還期、拠点解除後の3フェーズに区分した上で、6種のノード（トピック、活動、人々、場所、価値、リスク）と、それらの関係をネットワーク状に整理を試みた。予備的な読み取りでは、健康に関する記述の重心が、放射線や不安への対応から、生活再建と社会的再接続を経て、子育て、高齢者支援、参加、安心などの日常的ウェルビーイングへ広がる可能性が示された。本報告を通して、自治体広報を行政が望ましい生活像を提示する公式ナラティブとして扱いながら、地域資料を機械可読な知識資源へ変換する実践試行として示したい。

キーワード：自治体広報、災害復興、健康ナラティブ、ウェルビーイング、ナレッジグラフ。

Abstract: This report presents a pilot attempt to structure health- and welfare-related content in Koho Iitate, the official municipal public relations bulletin of Iitate Village, Fukushima Prefecture, as a knowledge graph and thereby facilitate its interpretation. The idea originated in the 2025 “Fukushima Reconstruction Knowledge” field-learning program, in which the author participated with students from Yamaguchi University, who consulted the bulletin as a local documentary source. Koho Iitate is publicly accessible on the village website in PDF format and constitutes a valuable archive of textual records. For this pilot, data were extracted primarily from health- and welfare-related pages and divided into three recovery phases: evacuation, return, and the period following the lifting of evacuation orders in the designated reconstruction base area. The extracted information was classified into six node types (Topic, Activity, People, Place, Value, and Risk) and the relationships among them were organized as a network. A preliminary reading suggests a possible broadening of health-related discourse: from responses to radiation-related concerns and anxiety, through livelihood reconstruction and social reconnection, toward everyday well-being encompassing child-rearing, support for older adults, participation, and a sense of security. By treating municipal public relations materials as an official narrative through which the municipal government articulates desirable forms of everyday life, this report presents the pilot as a practical attempt to transform local archival materials into machine-readable knowledge resources.

Key words: Disaster Recovery, Health Narrative, Knowledge Graph, Municipal Public Relations, Well-being.

1. 緒言

災害時のメディアは、緊急情報を伝えるだけでなく、被災地で生じる課題を論点化し、現地経験を記録・継承する役割を担う（吉見，2012）。とりわけ地方紙など地域メディアは、制度、支援、生活の場に関する細かな変化

¹ 山口大学国際総合科学部 / ひと・まち未来共創学環

¹ Faculty of Global and Science Studies / School of Collaborative Community Innovation, Yamaguchi University

Corresponding Author*: hsugino@yamaguchi-u.ac.jp

2026年7月31日受理。

を継続して記録する。一方、自治体広報は、地域で起きたことを外部から報道する媒体とは異なり、行政が何を課題として示し、誰にどの支援や行動を接続しようとするかを住民へ提示する役割を担っている。行政広報が地域のイベント告知や行政ニュースの発信にとどまらず、地域参加や協働に関わる重要なメディアであるとの議論（野口，2016；三井，2022）を踏まえると、自治体広報誌は、自治体・制度側が構成する地域住民の「望ましい日常」を読み取る一次資料になり得ると考えられる。

本報告の着想は、2025年度に実施された福島復興知フィールド学習（福島イノベーション・コースト構想推進機構が実施する「大学等の「復興知」を活用した人材育成基盤構築事業」の助成を受け、東京大学大学院農学生命科学研究科の溝口勝特任教授が各所大学生を集め実施されている飯舘村および福島県をフィールドとした復興の現場を学ぶためのフィールドワーク）に、著者が山口大学の学生と共に参加した経験から生まれた。著者が参加した日程は、2025年9月20日（土）～28日（日）および2025年11月22日（土）～23日（日）であった。飯舘村内のフィールドワークを通し、学生が現地で収集・参照した資料の一つが、福島県飯舘村の『広報いいたて』であった。山口へ戻った後、同誌が村のWebサイトで長期にわたり公開され、号別・ページ別に内容を確認できることを知り、フィールドワークの事後学習にも活用するに至った。そこで、山口という地理的に復興の現場である福島から離れた場所であっても、復興の推移を学び直す資料としての自治体広報誌の価値を再認識し、当該アーカイブに蓄積された記述（テキストデータ）を構造化することで、その目的遂行をサポートすることができるのではないかと考えた。本稿では、その成立過程や方法、作成された構造化データと可視化物（ネットワーク）に対する予備的な読み取りと考察、および今後の発展性について報告を行う。

2. 現地学習から『広報いいたて』へ

本試行の着想となったフィールド学習は以下の目的を掲げている：『福島から地理的に離れた地域に位置する大学から参加者を招き、大学間交流も踏まえた福島県浜通り地域でのフィールド学習を通じて、福島復興の過去と現在を学び、そこから国内地域の目線から復興の将来を考える。さらに、このフィールド学習を通じて、参加者各自が災害と復興の歴史を持つ日本の将来像を考え、参加者それぞれの社会的役割を考えるきっかけとする』。著者と山口大学の学生は、事前学習としてプロジェクトの概要や過去に現地を訪問した学生の経験を共有し、山口で入手できる情報を収集した上で現地に赴いた（図1～4）。フィールド学習当日には、現地の施設や地域の景観、行政および住民による取り組みに直接触れることにより、遠隔地で接する情報は、重要ではあるものの、特定の出来事や時点を切り取った断片になりやすいことを認識した。一方、現地では、制度の運用、生活環境の再編、地域活動の再開、支援の継続が、複数の時間軸の中で進行していた。したがって、現地の変化を継続的に理解するためには、一時的な訪問によって得られた記録や印象だけでなく、制度、相談窓口、行事、支援、地域の担い手などの更新を時間的に蓄積した資料を併せて参照する必要があると考えた。

こうした問題意識を具体化する契機となったのが、学生との現地学習を通して出会った『広報いいたて』である（図5）。現地活動の中で、学生が資料として閲覧・収集していた地域資料の一つが同誌であった。山口に戻った後、飯舘村のウェブサイトを確認したところ、電子版が公開されており、本試行で確認した範囲では、2002年度（平成14年度）から現在に至るまでのアーカイブを閲覧できることが分かった。『広報いいたて』のアーカイブは、年度別の一覧から各号へ移動でき、各号については全体版に加え、ページ単位のPDFまたは画像が公開されている（図6）。この構成は、健康・福祉に関するページを特定し、号ごとに抽出・比較する上でも有用であった。当該資料には例えば、2016年12月号には「教育のページ／ほけんとふくしのページ」が、2026年3月号には「ほけんとふくし『子育て全力応援！』」が収録されている（飯舘村，2016；飯舘村，2026）。2011年の東日本大震災以降の異なる復興フェーズをまたぎ、継続的に例えば健康・福祉といったトピックに関する記述を参照できるという時間幅と継続性は、復興過程の中で現場に出現した様々なトピックが、どのような制度、実践、主体、場所、価値によって支えられるものとして語られてきたのかを追うための基盤となりうると考えた。ただし、自治体広報誌は、住民一人ひとりの経験や、地域で生じている出来事の全体をそのまま写し取る資料ではない。掲載される内容は、行政側がその時点で重要と判断した課題、住民に周知したい制度や相談先、利用や参加を促したい事業、望ましいものとして提示する行動や価値を選択し、編集した公式記述としての性格が強い媒体である。言い換えると、自治体による政策的な意味づけを読み取るための重要な分析対象でもあると言える。

本試行では、こうした資料上の制約を含意しつつ、また取り上げて現地の健康と福祉に関するトピックに着目し、『広報いいたて』を「行政が復興期の健康・福祉をどのように意味づけ、施策、活動、主体、場所、価値およびリスクへ接続してきたのかを示す公式ナラティブ」として分析対象に位置づけた。その上で、個々の語の出現頻度を集計し概観を掴み、健康・福祉をめぐるトピック群の関係をナレッジグラフとして構造化し、復興フェーズ間でその結びつきがどのように変化したのかを検討することとした。

3. 広報アーカイブからの抽出と基礎処理

以上のことから本試行の母資料を、飯館村公式ウェブサイトで公開されている『広報いいたて』の年度別アーカイブとした。当該アーカイブは、年度別一覧から各号へ移動でき、各号について全体版のPDFに加え、ページ単位のPDFまたは画像を取得できる構造を有している。このため、健康・福祉に関係するページを号およびページ単位で特定し、時点間で比較することが可能であった。ただし、本試行では公開されている全号を網羅的に分析したのではなく、「ほけんとふくし」等の健康・福祉関連ページを確認できる号を目的抽出した。対象号の選定に当たっては、①復興過程の各時期を含むこと、②健康、保健、医療、福祉、介護、高齢者支援、子育て支援、心のケア、社会参加等に直接関係する記述を含むこと、③ページ単位で原資料を確認できること、の3点を基本的な条件とした。

本試行では復興過程を便宜的に、避難期（2011-2016年：2017年3月31日の避難指示解除以前）、帰還期（2017-2022年：避難指示解除後から2022年まで）、拠点解除後（2023-2026年3月：長泥地区の特定復興再生拠点区域等で避難指示が解除された2023年5月以降）の3フェーズに区分した（図7）。対象候補は表1に示す。公開資料にはテキストを抽出できるPDFと画像主体のページが混在するため、前者は本文抽出、後者はOCR（Optical Character Recognition：光学文字認識）を用いてテキスト化し、年月・号数・ページ等のメタデータを付与した。

抽出後のテキストには、発行年月、号数、ページ番号、記事またはセクション名、復興フェーズ、原資料のファイル形式、OCR処理の有無をメタデータとして付与した。これにより、グラフ上の各関係を、後から元の号および紙面へ戻って確認できるようにしている。原文と処理後テキストは別々に保持し、処理後テキストについては、ページ番号や定型的なヘッダー・フッターの除去、不自然な改行の統合、全角・半角の統一、句読点の整理、OCRによる文字化けの修正を行った。特に、組織名、事業名、地名、年月日、数値等はOCR誤認識の影響を受けやすいため、原資料と照合し適宜修正を行った。

次に、テキストを見出し、文、箇条書き等の意味単位へ分割した上で、形態素解析を補助的に用いて名詞句、固有表現、動作・状態を表す述語を抽出した。また、同一の対象が異なる表記で現れる場合には、原文表記を保持しつつ、分析用の代表表記を設定した。例えば、組織名の略称と正式名称、送り仮名の差、表記上の空白の有無等は同一エンティティへ統合した。一方、意味範囲が異なる語を過度に統合すると、フェーズ固有の語りを失う可能性があるため、「高齢者」と「要介護高齢者」のように対象範囲が異なる表現は、原則として別物として保持した。

4. 広報アーカイブの構造化設計

本試行では、『広報いいたて』に記載された健康・福祉情報の結びつきを表現するため、ナレッジグラフを構造化手法として採用した。ナレッジグラフは、文書中に現れる対象をノード、対象間の意味的關係をエッジとして表現するグラフベースのデータモデルである（Hogan et al., 2021）。単語の出現頻度を集計するだけではなく、健康・福祉に関する主題が、どのような活動、担い手、場所、価値およびリスクと接続されているかを捉えることを目的とした。

ノードは、記述内容に応じて、①『トピック』（健康、心のケア、生活再建、子育て等）、②『活動』（健診、相談、助成、交流、見守り等）、③『人々』（行政組織、関係機関、住民、参加者、支援対象者等）、④『場所』（施設、地域、生活空間、支援拠点等）、⑤『価値』（安心、つながり、定着、健康長寿等）、⑥『リスク』（放射線への不安、孤立、感染、転倒、アクセス困難等）の6種類に分類した。関係は方向をもつものとして、『活動』が『トピック』または『リスク』に“対応する”『人々』が『活動』を“実施する”『活動』が特定の『人々』を“対象とする”『活動』が『場所』で“実施される”『活動』が『価値』を“促進する”『リスク』が『トピック』または『価値』を“脅かす”等のパターンを記録し、抽出した。例えば、「健康福祉課が子育て支援金を支給し、安心して子育てできる環境を支える」という記述は、〈子育て—対応される—子育て支援金〉、〈子育て支援金—実施される—健康福祉課〉、〈子育て支援金—促進する—安心して子育てできること〉という複数の三つ組に分解した。エッジは、単に同一の文や段落に複数の語が出現したという共起のみでは付与せず、述語、助詞、見出しと本文の対応、箇条書きの構造等から意味的な関係が確認できる場合に限定した。また、各エッジには発行年月、号数、ページおよび根拠となる原文を付与し、グラフ上の関係から原資料へ遡及できるようにした。

上記ノードとエッジの抽出には、健康・福祉関連の語彙辞書、表現パターン、形態素解析および言語モデルを補助的に用いた。言語モデルには、あらかじめ定めた6種類のノード型と関係型に基づいて候補を提示させたが、出力は自動的に採用せず、原文上の根拠、分類の妥当性、関係の方向、同一語の表記統一を人手で確認した。根拠が不明確なものや、文脈を越えた推測を必要とする関係は除外した。

最終的に、抽出したノードとエッジを用いて有向ラベル付きグラフとして構築した(図8)。また、復興フェーズごとにサブグラフを作成し、ノード数、エッジ数、ノード型・関係型の構成、次数中心性を比較するとともに、「どのリスクにどの活動が対応しているか」「誰がどこで健康を支えているか」「どの活動がどの価値へ接続されているか」を検討した。加えて、ナレッジグラフ内に見られるトピックから活動、人々、場所、価値へ至る短い特徴的な経路パターンを“チェーン”として抽出し(図9)、健康やウェルビーイングのような抽象的概念が、具体的な制度、実践、担い手および場へどのように翻訳されているかの質的な読み取りを試みた。

5. 復興フェーズ別の読み取りと解釈

(1) 避難期：リスク管理と不安軽減

2016年12月号を中心にみると、放射線、健康不安、心のケア、総合健診、相談等の結びつきが前景化した。健康は、身体状態だけでなく、不確実性や不安への対応として提示され、村、健康福祉部門、専門職による相談・検査が「安心」へ接続されていた。この段階では、健康を守ることが、まずリスクを測り、説明し、支援へつなぐ行為として構成されていたと読める。

(2) 帰還期：生活再建と社会的再接続

2017-2022年の選択号では、帰還、医療へのアクセス、施設や交流機会の再開、口腔ケア、感染症対応等が同じネットワークに現れた。サポートセンター「つながっぺ」のように、人と支援を再び結ぶ主体・場所も重要になる。健康は、疾病の予防だけでなく、移動できること、相談先へ到達できること、他者と会えること、生活のリズムを取り戻すことへ広がる。すなわち、生活再建の条件を整え、分断された関係を再接続する語りへ重心が移る可能性がある。

(3) 拠点解除後：日常的ウェルビーイングへの広がり

2023年以降では、子育て支援金、妊婦支援、医療費助成、こども園・子育て支援センター、高齢者の体力測定、認知症サポーター講座、カフェ、体操、行政区サロン等が確認された。例えば2026年3月号では、子育てという主題が、助成・相談・遊び場、健康福祉部門やこども家庭センター、こども園等を介し、「安心して子育てができる」「やさしい村」という価値へ結びつく(飯館村, 2026)。また、高齢者支援では、体力・認知機能への対応と、集い・交流・参加の場が「つながり」や「健康長寿」へ接続される。ここでは健康が、危険を避ける状態にとどまらず、世代を超えて暮らし続け、参加し、関係を保つ日常的ウェルビーイングへ翻訳されていると解釈できる。

以上をまとめると、選択号の範囲では、健康の公式ナラティブが「リスク管理」から「生活再建・再接続」を経て、「日常的ウェルビーイング」へ広がるという見取り図が得られた。

6. まとめ

本報告では、2025年度の「福島復興知フィールド学習ツアー」を契機として、飯館村の公式広報誌『広報いいたて』に掲載された健康・福祉関連の記述を抽出し、情報の関係性からなるナレッジグラフへ構造化する試行を示した。本試行を通して、現地学習が資料だけでは把握しにくい地域の空間的・生活的文脈を理解する機会を与える一方、自治体が発行する広報誌アーカイブは、個別の訪問時点を越えて、制度、相談体制、支援、活動の場がどのように更新されてきたのかを継続的に追跡することを可能にすることを実感した。両者を往還することにより、現地で得た問いを一過性の感想にとどめず、帰学後の持続的な調査と学習へ接続できる点に、自治体広報誌アーカイブが有する学術的な価値を見た。作成されたナレッジグラフからは予備的な考察として、健康をめぐる記述の重心が、放射線や不安への対応を中心とするリスク管理から、生活再建と社会的再接続を経て、子育て、高齢者支援、参加、安心、つながり等を含む日常的ウェルビーイングへ広がってきた可能性が示された。ナレッジグラフは、こうした抽象的な価値が、助成、相談、交流、体操等の実践と、それを担う組織や利用される場所を介して具体化される関係を可視化する方法として有用であると考えられる。

一方、本試行は選択した号を対象とする探索的分析であり、フェーズ間で資料量が均等ではないこと、エンティティと関係の付与に分析者の判断が含まれること、原文に明記された価値と分析者が関係構造から推論した価値とを区別する必要があることなどの課題を多く残していることも付記しておく。今後は、全期間から対象資料を体系的に抽出し、コーディングブックや辞書などを整備した上で、フェーズ別ネットワークを改良・再構築する必要があると考えている。さらに、住民や行政職員への聞き取り、質問紙、地方紙、SNS等との照合を通じて、公式に提示された健康像と生活実態との一致およびずれを検討したい。現場経験、地域アーカイブ、機械可読な関係データを接続する本試行を、復興という長い時間がかかる現場の動きについて遠隔地からでも学び続け、地域を越えた対話へつなげる方法の一つとしてさらに発展させていきたい。

謝辞

本報告の契機となったフィールド学習および関連活動は、福島イノベーション・コースト構想推進機構が実施する「大学等の『復興知』を活用した人材育成基盤構築事業」の支援を受けた。また、本研究の一部は JSPS 科研費 23K09465 の助成を受けた。現地でご対応いただいた自治体関係者、住民の皆様、東京大学の溝口勝教授、参加学生および関係者に記して謝意を表す。

引用文献

- Hogan, A., Blomqvist, E., Cochez, M., d'Amato, C., de Melo, G., Gutierrez, C., Kirrane, S., Labra Gayo, J.E., Navigli, R., Neumaier, S., Ngonga Ngomo, A.-C., Polleres, A., Rashid, S.M., Rula, A., Schmelzeisen, L., Sequeda, J.F., Staab, S., and Zimmermann, A. 2021. Knowledge graphs. *ACM Comput. Surv.*, 54(4), Article 71, 1–37. DOI: 10.1145/3447772.
- 飯舘村 2016. 広報いいたて 平成 28 年 12 月号 (No.634) . <https://www.vill.iitate.fukushima.jp/site/kouhou/476.html> (2026 年 7 月 30 日最終閲覧)
- 飯舘村 2025. 広報いいたて 令和 7 年 11 月号 (No.741) . <https://www.vill.iitate.fukushima.jp/site/kouhou/13817.html> (2026 年 7 月 30 日最終閲覧)
- 飯舘村 2026. 広報いいたて 令和 8 年 3 月号 (No.745) . <https://www.vill.iitate.fukushima.jp/site/kouhou/14382.html> (2026 年 7 月 30 日最終閲覧)
- 三井祐介 2022. 行政広報チャンネルの特徴と広報誌の活用状況について. *公共コミュニケーション研究*, 7(1), 17–30.
- 野口将輝 2016. 市民協働の観点からの行政広報評価—行政広報と地域運営に参加する市民の意識—. *公共コミュニケーション研究*, 1(1), 14–21.
- 吉見俊哉 2012. メディア文化論—メディアを学ぶ人のための 15 話 改訂版. 有斐閣, 東京.



図1 山口大学における事前学習の様子
(筆者撮影)



図2 IoT 農業機器が設置されたフィールド見学
(筆者撮影)



図3 ブドウ摘果作業体験の様子
(筆者撮影)



図4 圃場に繋がる道の普請作業の様子
(筆者撮影)



図5 広報いいたての表紙イメージ

(<https://www.vill.iitate.fukushima.jp/site/kouhou/13817.html>)

No.741 (令和7年11月号) [PDFファイル/9.88MB]	
1ページ 表紙	1ページ [PDFファイル/626KB] 1ページ (画像) ※タブレット・スマホむけ
2～3ページ 話題「秋のイベント大集合！」	2～3ページ [PDFファイル/1.94MB] 2～3ページ (画像) ※タブレット・スマホむけ
4～5ページ 特集「実りの秋に輝け！いいたてっ子」(1)	4～5ページ [PDFファイル/1.63MB] 4～5ページ (画像) ※タブレット・スマホむけ
6～7ページ 特集「実りの秋に輝け！いいたてっ子」(2)	6～7ページ [PDFファイル/1.69MB] 6～7ページ (画像) ※タブレット・スマホむけ
8～9ページ 特集「実りの秋に輝け！いいたてっ子」(3)	8～9ページ [PDFファイル/2.06MB] 8～9ページ (画像) ※タブレット・スマホむけ
10～11ページ 学びの広場「全国学力・学習状況調査」	10～11ページ [PDFファイル/1.33MB] 10～11ページ (画像) ※タブレット・スマホむけ
12～13ページ ほけんとふくし「飯館村敬老会」	12～13ページ [PDFファイル/1.55MB] 12～13ページ (画像) ※タブレット・スマホむけ

図6 1号分のアーカイブ構造

(<https://www.vill.iitate.fukushima.jp/site/kouhou/13817.html>)



図7 震災発生以降現在に至るまでの復興のフェーズ分け

表1 本試行で用いた復興フェーズと対象号候補

フェーズ	対象号候補	主な健康・福祉関連要素
避難期 2011–2016	2016年12月 No.634	放射線相談, 心のケア, 総合健診, 不安軽減
帰還期 2017–2022	2017年9月 No.643, 2018年4月 No.650, 2018年6月 No.652, 2019年7月 No.665, 2020年8月 No.678, 2021年6月 No.688, 2022年6月 No.700	帰還・アクセス, 交流再開, 口腔ケア, 感染症対応, 生活再建
拠点解除後 2023–2026年3月	2023年5月, 2023年12月, 2026年3月 No.745	子育て・妊婦支援, 医療費助成, 高齢者支援, 講座, 体操, 集い



図8 作成されたナレッジグラフ (<https://yamami-lab.org/iitate-kg/>)

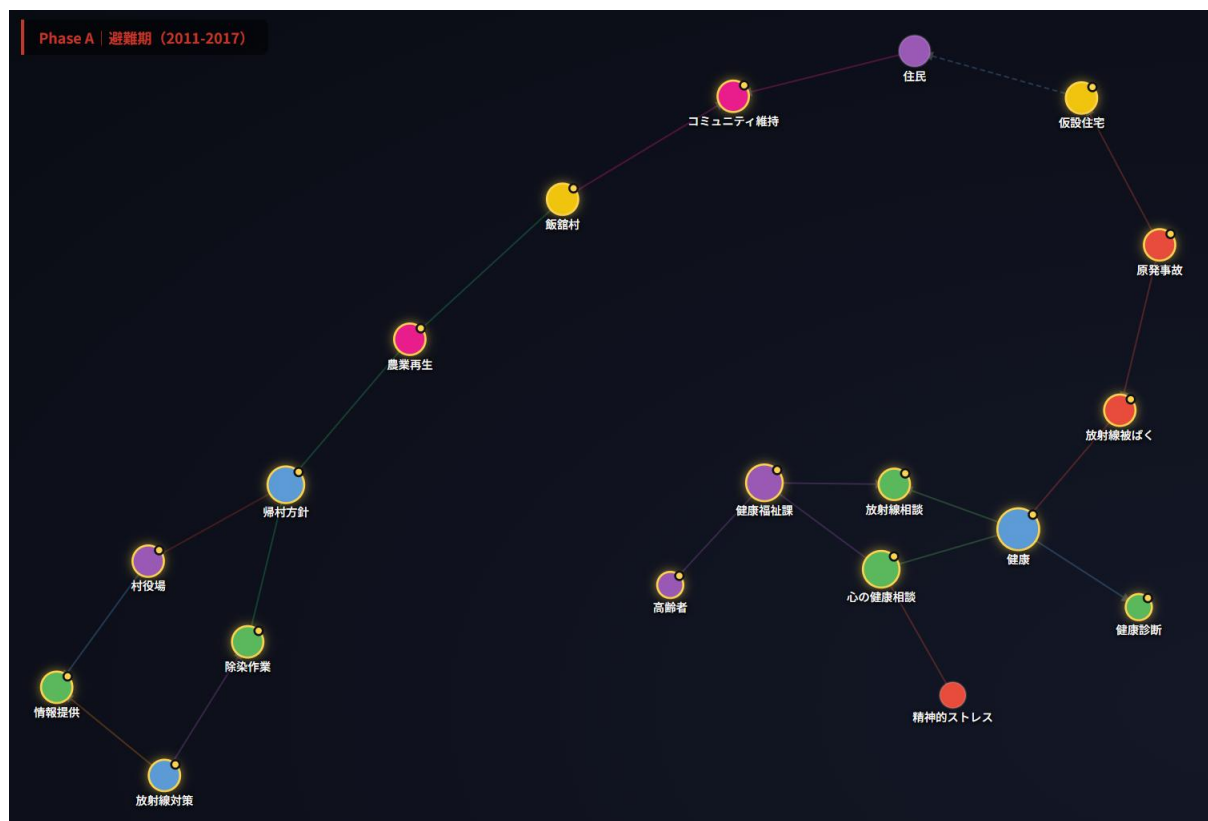


図9 避難期（2011-2017）において形成されたチェーン

■現場からの報告

田んぼがくれた第二の青春 —退職教授のいいたて稲作奮闘記—

A Second Youth Gifted by the Rice Fields
- A Retired Professor's Account of His Struggles in Rice Farming -

溝口 勝¹

Masaru MIZOGUCHI¹

要旨：本稿は、退職後に福島県飯舘村で稲作に取り組んだ一農学研究者の体験を記録したものである。田んぼづくりから水管理や雑草防除など、これまで研究室では十分に経験することのなかった実践に直面し、試行錯誤を繰り返す中で、農業の難しさと面白さを改めて実感した。その過程で、現場の知恵や地域の経験から学ぶことの重要性を再認識するとともに、農学は現場との往復の中で発展する学問であることを強く感じた。本稿では、思い付きで始めた稲作体験を通して得られた気づきを紹介するとともに、農業と地域、そして農学との関わりについて考える契機を提供したい。

キーワード：飯舘村、稲作、農学、現場知、復興。

Abstract: This essay describes the experiences of an agricultural researcher who began rice cultivation after retirement in Iitate Village, Fukushima Prefecture, Japan. Through firsthand challenges in preparing the rice paddies, water management, weed control, and daily fieldwork, the author rediscovered both the difficulties and the rewards of farming. The experience highlighted the importance of learning directly from agricultural practice and from the knowledge accumulated by local communities. Rather than presenting scientific findings, this report reflects on how practical farming can deepen our understanding of agriculture. It reminds us that agricultural science should continuously interact with the realities of the field. This personal account may encourage readers to reconsider the relationship between agricultural science, farming, and rural communities.

Keywords: Iitate Village; Rice cultivation; Agricultural science; Field-based learning; Reconstruction.

I. はじめに

「苗が余っていますが、どうしますか。」すべては、この一言から始まった。

2011年の原子力災害で被災した飯舘村は、計画的避難指示が解除されても高齢者しか戻らず、今後どのように村を維持していくかが大きな課題になっている(溝口, 2023)。そんな中、私は国内外の学生に呼びかけ、実際に現地に足を運んで村の現状を知り、復興とは何かを考えてもらう教育活動を続けている。その一つにアメリカ・ケネソー州立大学の学生たちに飯舘村で田植えを経験してもらうツアーがある。

今年の5月27日、そのツアー学生たちの酒米田植え(飯舘村, 2026)の苗が余った。捨てるには惜しい。だったら自分で植えてみるか。そんな軽い気持ちだった。ところが、苗は田んぼ一枚に植えるには足りない。それならSRI(溝口, 2012)を真似して一本植えにしよう。残り半分は直播SRIにして比較実験をしたら面白いだろう。しかし、この時はまだ知らなかった。本当に始まるのは、田植えではなく田んぼづくりだった。

私は長年、東京大学で土壌物理学を研究してきた。駒場の学生には土と水の環境科学を教え、研究では土が凍る過程での土壌中の水・熱・溶質の移動現象に関する実験をして、理論を構築し、コンピュータシミュレーションで現象を再現する内容で博士論文を書いた。ところが、実際に自分の田んぼに立つと、そうした理論は全く役に立たない。頭の中では、学部3年生の時に農地工学や農業水利学で習った「浸透路長」「静水圧」「含水比」そんな専門用語ばかりが浮かぶ。しかし現実には、田んぼに水が来ない。田んぼから水が漏れる。逃げる。止まらない。SNSに毎日その日の率直な気持ちを書き綴った。

¹ 東京大学大学院農学生命科学研究科

¹ Graduate School of Agricultural and Life Sciences, The University of Tokyo.

Corresponding Author*: mizo@g.ecc.u-tokyo.ac.jp

2026年7月31日受理。

II. 水との闘い ― 農業基盤を身体で学ぶ

15年間使われていなかった草だらけの田んぼの耕耘は大変だった。トラクターで荒起こしをすると、除染工事後の客土に混じっていた石ころがゴロゴロ出てきて、地表面を平らにするのもままならない。それでも何とか耕耘を終えた。

次にこの田んぼに水を引く。コンクリート桝に止水板を設置し、堰をつくり、流れを変え、水位を上げねばならない。教科書的には水は高いところから低いところへ流れる。ところが現場では、その「当たり前」が思い通りにならない。結局、頼りになったのは高度な理論ではなく土嚢だった（図1）。

―5月30日：理屈はわかっているが、実践は難しい。結局は土嚢が1番確実なような気がする。

この時点では、まだ田んぼ作りが始まったばかりだった。翌朝になると、日の出とともに田んぼへ向かうようになる。水は来ているだろうか。土の堰は壊れていないだろうか。一晩で何が変わったのか。毎朝、最初に見るのは天気予報でも新聞でもない。田んぼだった。

―6月1日：田んぼに水が来ているのか？ 日の出とともに田んぼを見に行く気持ちがわかる気がする。

この頃から、私の生活は時計ではなく田んぼに合わせて動くようになった。朝日が昇れば外へ出る。昼になれば水位を見る。夕方になればもう一度見回る。家は田んぼの目の前にある。「田んぼへ通う」のではない。田んぼと一緒に暮らし始めたのである。

III. またしても失敗 www ― 水との知恵比べ

田んぼづくりが始まって最初の二週間は、とにかく失敗の連続だった。朝起きると田んぼへ向かう。昨日うまくいったと思ったことが、翌朝にはうまくいっていない。そんなことが毎日のように起こる。

6月初旬、傾斜のあるコンクリート水路からホースで直接田んぼへ水を送ろうと考えた。学生時代に学んだ水理学の原理を思い出し、これなら効率よく導水できるだろうと考えたのである。ところが翌朝見に行くと、ホースは見事に潰れていた（図2）。

―6月3日：ホースが射流で見事に潰れていた。またしても失敗 www

潰れたホースを見て少し考えると、原因はすぐに分かった。コンクリート水路の急勾配によって流れが常流から射流に変わり、その負圧でフレキシブルホースが潰れたのである。そこで、フレキシブルホースを耐圧ホースに交換した。すると水は流れたものの、翌日、今度は水路に設置した土嚢ごと流されていた。

―6月12日：雨が上がったので流量を測ろうと思って田んぼに行ったら何と！土嚢ごと流されていた！！チャラリン、鼻から牛乳！

普通なら落ち込むところである。ところが、自分でも不思議なくらい面白かった。「なぜだろう。」「次はどうしよう。」「失敗するたびに考え始める。研究室で実験をしていた頃と全く同じである。現場は、毎日新しい実験結果を見せてくれる。違うのは、査読者がいない代わりに、田んぼそのものが容赦なく'Reject'を突きつけてくることだった。止水板も、ホースも、パイプも試した。結局、水を止めるのに一番役に立ったのは、複雑な装置でも最新技術でもなく、土を袋に詰めただけの、ごく単純な土嚢だった。長年、土壌物理学を研究してきた人間が、最後は土嚢の偉大さに感心しているのである。土嚢中の土壌を構成する粘土成分が水で膨潤し、砂やシルトの間隙を塞ぎ、透水係数が低下しているのか！そんな当たり前の自然現象が土嚢中で起こっているのである。

そんな毎日を繰り返しているうちに、私の生活は完全に田んぼ中心になっていった。朝、障子戸を開ける。まず田んぼを見る（図3）。朝食前に外へ出る。昼にもう一度見る。夕方にも見る。その変化はわずか数センチの水位かもしれない。しかし、その数センチが気になって仕方がない。気が付けば、退職後の毎日は、研究室ではなく田んぼが私の実験室になっていた。

IV. 田車は思うようには動かない

6月下旬、水の問題がようやく落ち着き始めると、今度は雑草との戦いが始まった。私はSRI（System of Rice Intensification：稲作集約栽培法）の研究会（J-SRI研究会HomePage）の事務局長を20年間続けてきた。一本植えや間断灌漑には理論的な裏付けがある。田車による除草も、その重要な技術の一つである。だから、田車を押せば雑草は取れるものだと思っていた。しかし、現実とは違った。原発事故後の2012年の除染実験以来、14年ぶりに田車を飯館村の田んぼで走らせたものの、水が十分に行きわたっていない場所では田車の歯が土に食い込まず、草はほとんど取れない。

―7月10日：田んぼに水が行き渡ってないところでは全く除草にならない。もっと水位を上げて田んぼの土を泥にしてからでないと効果なし。振り出しに戻る orz

私は改めて思い知らされた。田車は雑草を取る道具ではない。土を動かす道具なのである。泥が柔らかくなく

れば菌は入らない。菌が入らなければ土は攪拌されない。土が動かなければ雑草も抜けない。理屈としては簡単だが、自分の田んぼで体験すると、その意味がまったく違って感じられる。

雑草の生い茂った田んぼで何度も田車を押す。条間の縦方向に押す。横方向にも押す。朝食後に押す。疲れたら少し休み、また押す。泥が巻き上げられて田んぼの色が変わっていく（図8）。雑草が見えなくなっていく（図7）。その様子を見ていると、まるで田んぼ全体が呼吸を始めたようだった。

ー7月13日：土日の作業で条間の雑草が見えなくなった。

この一文の裏には、何日もの試行錯誤が隠れている。

さらに興味深かったのは、水の流れだった。田車で作業を続けていると、排水のために切った溝には雑草がほとんど生えないことに気付いた。

ー7月13日：同じように見えても田んぼのぬかるみ方が異なる。排水溝を作った条間には雑草が生えない。

論文を読んで得た知識ではない。教科書にも書いていない。毎日泥だらけになりながら田んぼを歩いた者だけが得られる、小さな発見だった。もちろん、思いどおりには進まない。

一本植えの苗は、周囲の普通植えと比べると頼りなく見える。それでも毎朝観察を続けていると、一本だった苗が少しずつ分けつを始めた（図9）。しかしながら、直播した区画では本当に芽が出るのか不安だった。

ー7月21日：一本植えの苗が分けつして、通常植えに近づいてきたようだ。

研究者は、統計処理をしたデータだけで喜ぶわけではない。昨日より一本茎が増えた。水位が数センチ変わった。泥の色が違う。そんな小さな変化を見つけたときの喜びこそ、研究の原点なのだ。

退職して研究室を離れても、その楽しさだけは何も変わっていなかった。むしろ田んぼは、実験室よりもずっと正直だった。思い込みは通用しない。努力も付度してくれない。しかし、毎日見続けていれば、必ず何かを教えてくれる。だから私は、翌朝もまた日の出とともに田んぼへ向かった。

V. イネはどこへ行った？

7月に入ると、田んぼは急に賑やかになった。苗は育つ。雑草も育つ。オタマジャクシが泳ぎ、夜中にイノシシが徘徊してる様子がカメラに映っている。毎日何かが起きる。

その中でも一番の挑戦は、田植えをした左半分ではなく、種籾を直接播いた右半分の直播SRIだった（図8）。7月4日、学生たちと一粒ずつ種を播いた（図5）。海外の事例はあるが日本では例のない直播SRI実験である。

一本植えの苗も少しずつ分けつを始めた。「これは面白い結果になるかもしれない。」そう思い始めた頃、雑草が一気に伸びた。毎朝イネの芽を探していたのに、雑草の成長のほうが圧倒的に速い（図10）。

ー7月27日：直播SRIの田んぼの現状。イネがどれだか全くわからないorz

私は本気で困った。研究の対象であるイネが雑草の海に埋もれてしまい、いくら頑張っても自分ではイネと雑草の見分けがつかない。そこでSNSに助けを求めた。

ー7月27日：どうする？ アイデア募集します。

すると、すぐに反応が返ってきた。「今年は諦めて牛の餌にする。」そんな冗談も寄せられた。もちろん、諦めるつもりはない。翌朝には、専業農家の幼なじみから電話がかかってきた。「地元のJAに行ったら除草剤の相談をしろ。」その助言に従ってJAへ向かい、紹介された除草剤を購入し、その日のうちに散布した。

大学では、理論を教えることが多かった。しかし田んぼでは、教えてくれるのは実践している農家だった。私は、土壌物理学の専門家として田んぼに入ったつもりだった。ところが現場では、一年に一度しかない稲作を何十年も続けてきた人たちの経験にはかなわない。そのことを思い知らされた。

でも、除草剤を散布している最中、雑草の間に残った小さな水たまりを見て、ふと三十年前のツンドラ調査を思い出した。普通なら、「雑草が減るだろうか。」そう考える場面だろう。ところが私の頭の中では、極北のコケの中の水たまりと、飯館村の田んぼがつながってしまう。研究者というのは、案外そういう生き物なのかもしれない。目の前の景色は変わっても、自然を見る目だけは、学生時代から何も変わっていなかった。そして私は、除草剤が効くことを願いながら、SNSにこう書いた。

ー7月27日：除草剤効くかなあ？

教授でも、退職教授でもない。一人の初心者農家としての、実に率直な一言だった。

VI. おわりに 田んぼがくれた第二の青春

退職すると時間ができる。好きなことをして暮らせる。そんなイメージを持つ人は少なくない。しかし私にとって退職後の毎日は、決して「ゆっくりした生活」ではなかった。朝になれば田んぼが気になる。雨が降れば水位が気になる。暑くなれば雑草が気になる。出張中でさえ、

ー7月8日：畔を見回るロボットが欲しい。開発するか？

などつぶやいている。結局、研究者は退職しても研究者なのだろう。ただ、研究室が田んぼに変わっただけである。もっとも、田んぼは大学よりずっと厳しい。論文なら何度でも書き直せる。実験もやり直せる。しかし稲作は一年に一度しかない。昨日失敗したことは、今日取り返さなければならない。だから毎朝、田んぼへ出る。

振り返れば、この数か月で私は実に多くのことを教えられた。水は思うようには流れない。ホースは潰れる。土囊は流される。サルやイノシシが田んぼを狙っている。田車は泥水がなければ役に立たない。雑草はイネより元気に育つ。その結果、イネがどれだかわからなくなる。失敗ばかりではないか！その通りである。しかし、不思議なことに、少しも嫌ではなかった。昨日できなかったことを今日できるようにする。昨日は見えなかったことが今日は見える。田んぼは毎日、新しい発見を用意してくれていた。その積み重ねが楽しい。だから、日の出とともに外へ出る生活は全く苦にならない。むしろ、体重が減り健康的だ。

次は何が起きるのだろうかという期待のほうが大きい。考えてみれば、これは若い頃と同じである。新しい研究を始めた頃も、毎朝研究室へ向かうのが楽しみだった。「今日は何かわかるかもしれない。」そんな感覚で一日が始まっていた。退職して、その感覚は味わえないかと思っていた。ところが飯館村の田んぼが、その感覚を与え続けてくれている。

研究とは、論文を書くことではない。自然を相手に、「なぜだろう」と問い続けることなのだ。この田んぼには、研究ネタがたくさんある。直播 SRI は日本で可能なのか。一本植えでどこまで分げつするのか。間断灌漑は本当に効果があるのか。雑草との付き合い方は。サルやイノシシとの知恵比べは。

来年は、今年とは違う課題がきっと現れるだろう。だから、この物語は今年で終わりではない。来年も田んぼは新しい研究ネタを出してくるに違いない。私はそのネタを、一つずつ楽しみながら解いていこうと思う。

飯館村で田んぼを始めたのは、余った苗を捨てるのがもったいないからだ。ところが最後に残ったのは、苗でも収穫でもなかった。毎朝外へ出たくなる理由、失敗してももう一度やってみようと思える気持ち。そして、自然から学び続ける喜びだった。それこそが、退職した私が田んぼからもらった、何より大きな収穫である。田んぼは、私に第二の青春をくれた。

執筆過程における AI および AI 支援技術の使用宣言

本論文の執筆過程で、ChatGPT5.5 を使用して自分自身の SNS や過去の著作物を中心に全体構成を作成しましたが、その内容は自分自身で十分に吟味しました。出版物の内容に対しては私が完全な責任を負います。



図1 止水板を設置して水位を確保しようとした最初の試み（2026年5月30日）



図2 急斜面のコンクリート水路の射流中で潰れて水が流れなくなったホース（6月3日）



図3 家の障子戸を開けると現れる田んぼ(5月30日)
窓を開けっ放ししていたらツバメが入ってきた。もっと良い場所がありそうな移住サポートセンターを紹介しよう www



図4 田植え風景 (6月22日)
小雨の中、SRI 擬き(もどき)の酒米1本植えに挑戦。参加者は大田原高校の生徒4名と引率教員。J-SRI 研究会の若手メンバー3名と山路会長。地元の若手2名。



図5 直播 SRI に挑戦 (7月4日)
東大むら塾生4名と修論を書き終えたばかりの東大 IPADS 学生3名が直播 SRI に挑戦。この時には地面が見えていたのだが・・・。



図6 田車を押す Dr. ドロえもん (7月13日)
学生が撮影してくれた田車作業の動画が届いた。この日出っ張った腹で押すと楽なことを発見 www
YouTube 動画 <https://youtu.be/C1iaJIEqBw8>



図7 田車除草後の田んぼ全景 (7月13日)
条間の雑草が見えなくなった。田んぼのぬかるみ方が異なる。排水溝を作った条間には雑草が生えない。



図8 家から見た田車除草後の田んぼ全景(7月13日)
田車作業した直後は黄色いドロが巻き上がっている。田んぼの右半分は雑草に覆われ始めた直播 SRI 区。



図9 一本植えの分けつ (7月21日)

一本植えの苗が分けつして、通常植えに近づいてきたように見える。ただし、育ち方にバラツキがある。



図10 直播SRIの田んぼの現状 (7月27日)

イネがどれだか全くわからないorz どうする？

参考文献

- 1) 飯舘村 2026. 広報いいたて 令和8年7月号 (No.749), p.20, <https://www.vill.iitate.fukushima.jp/site/kouhou/14848.html> (2026年7月30日閲覧)
- 2) J-SRI 研究会 HomePage . <https://www.iai.ga.a.u-tokyo.ac.jp/j-sri/index.html> (最終アクセス日 2026年7月30日)
- 3) 溝口勝 2023. 原発事故後の農業と地域社会の再生. 農村と都市をむすぶ誌 No.854, pp.40-51. <https://www.iai.ga.a.u-tokyo.ac.jp/mizo/papers/zennorin230314.pdf> (最終アクセス日 2026年7月30日)
- 4) 溝口勝 2012. SRI の決め手は間断灌漑―土壌水分の制御―にあり. 熱帯農業研究 5(2). 175-178

資料

- 溝口 勝 Facebook 投稿 (2026年5~7月) <https://www.facebook.com/masaru.mizoguchi>
 溝口 勝 X 投稿 (2026年5~7月) <https://x.com/msrmz>

復興農学会

2025 年度

第 5 回 復興農学研究会

THE 5th ANNUAL MEETING OF THE SOCIETY OF RESILIENCE AGRICULTURE

日時：2026 年 3 月 20 日（金・祝）9：40～15：50

場所：コラッセふくしま 4 階 402 号室

およびオンライン（Zoom）

主催：復興農学会

<https://fukkou-nougaku.com/>

■□■ 全体議事次第 ■□■

日程 2026年3月20日（金・祝）9時40分～15時50分

場所 コラッセふくしま 4階402号室

事務局 〒960-1296 福島市金谷川1 福島大学食農学類

運営委員長：新田洋司 運営委員：石井秀樹・Djedidi Salem

参加費 2,500円（対面・リモート）

【全体タイムテーブルど】

I.口頭発表 09時40分～12時40分

II.ポスター発表 13時25分～13時55分

III.シンポジウム 14時00分～15時50分

IV.総会 16時00分～17時00分

V.懇談会 17時30分～

I. 口頭発表

- ①9:40- 後藤慎吾、磯洋一（古河産業株式会社）、原田茂樹（福島大学食農学類）
『毛管ドレインベルトの圃場（転換畑）での排水効果の確認
～復興圃場の排水管理による効率化にむけて～』
- ②10:00- 原田茂樹、松木志帆、平野昂琉、（福島大学食農学類）、脇山義史（福島大学環境放射能研究所）
『森林バイオマスの湿式酸化法による減量と Cs 低濃度化：攪拌法と密閉容器法』
- ③10:20- 石井秀樹（福島大学食農学類）
『放射性セシウムの汚染評価と計測スケールに関する考察』
- ④10:40- 小高慎太郎（東京大学大学院農学生命科学研究科）、石橋宙郎（東京大学大学院工学系研究科）
『ホップ栽培を通じた福島県飯舘村の地域活性化・関係人口創出』
- ⑤11:00- 木野凱平（東京大学）
『東大むら塾の飯舘村における活動について』
- ⑥11:20- 溝口勝（東京大学大学院農学生命科学研究科）
『生成 AI に「復興農学とは何か」を尋ねる実験』
- ⑦11:40- 杉野弘明（山口大学国際総合科学部）
『災害復興期における自治体健康ナラティブの構造変容 — 「広報いいたて」を対象としたナレッジグラフ分析』
- ⑧12:00- 怒和桃子（山口大学国際総合科学部）
『福島県およびフランス・グラヴリーヌでのフィールドワークに基づく事前イメージと実見の差異と意識変容の過程の質的分析』
- ⑨12:20- 加藤泰熙・石井秀樹・福島慶太郎（福島大学食農学類）
『阿武隈川沿い河川竹林の管理状況と水防林としての可能性および課題』

II. ポスター発表

- ①大島健琉 a、大豆生田隼 a、中山琰鶴 a、宇田川理奈 b、白井美翔 b、長凜華 b、室井光輝 b、加藤信行 a 『飯舘村実地研修が高校生の復興意識に与える影響の分析』
- ②相田稜太 a、白井修人 a、加藤信行 a 『高校生を対象とした復興教育の実態と意識に関する調査』
- ③後藤敦哉 a、開沼博 c 『高校生における農業のイメージと実態に関する研究』
a:大田原高校、b:大田原女子高校、c:東京大学大学院情報学環

III. シンポジウム

『東日本大震災後の産業復興と地域の持続可能性』
基調講演 『岩手県の水産業の復興と現状について』
田村直司氏 (岩手大学三陸水産研究センター客員教授)

モデレーター：丹野史典氏 (岩手大学研究・地域連携部 産学官連携専門職員)

【ZOOM リンク】

<https://us06web.zoom.us/j/87056945590?pwd=ICygrBP3bo8L8GSbNvabO3S63iZS5m.1>

ミーティング ID: 870 5694 5590

パスコード: 775262

■ □ ■ 一般講演要旨集 ■ □ ■



■□■ I. 口頭発表 ■□■

①9:40- 後藤慎吾、磯洋一（古河産業株式会社）、原田茂樹（福島大学食農学類）

『毛管ドレインベルトの圃場（転換畑）での排水効果の確認 ～復興圃場の排水管理による効率化にむけて～』

Drainage performance of capillary drain belts for conversion fields:
efficiency of drainage system for farmland restoration

復興のためには転換畑を含む圃場での水分管理が重要であるため、福島大学圃場にて毛管ドレインベルト（DB）の設置間隔（2m間隔：密、4m間隔：粗）と土壤水分・排水挙動の関係をモニタリングした。DB 設置時は土壤水分量が低下する傾向が見られ、密の排水量の方が多かった。目詰まり及び定期交換の必要性がないことから、被災地の復興圃場整備に DB は有効であると考ええる。なお土壤水分低下は雨水流出抑制にも寄与する。

Capillary drain belts (DBs) were installed at 2- or 4-meter spacing in a test field at Fukushima University. Monitoring revealed that the DBs reduced volumetric water content (VWC), with the 2-meter spacing producing a greater reduction than the 4-meter spacing. Because they do not clog and therefore require no maintenance, DBs are thought to be effective for VWC control and thereby for farmland restoration in Fukushima. Additionally, VWC reduction is expected to increase the runoff reduction ability of farmland.

キーワード：毛管ドレイン，排水，復興圃場

Keyword : Capillary Drain Belt, Drainage, Farmland Restoration

②10:00- 原田茂樹、松木志帆、平野昂琉、(福島大学食農学類)、脇山義史 (福島大学環境放射能研究所)

『森林バイオマスの湿式酸化法による減量と Cs 低濃度化：攪拌法と密閉容器法』

Reduction in Weight and Radioactive Cs Concentration of Forestry Biomass by Wet Oxidation: Mechanical Stirring and Sealed-Bottle Methods

湿式酸化は、森林バイオマス中の放射性 Cs を液相（次亜塩素酸ナトリウムと超純水による）に移行させる技術であり、ガス態 Cs が発生せず液相内で Cs 収支がとれる安全性の高い技術である。二つのバージョン（攪拌法：解放型機械混合系、と、密閉容器法：閉鎖型熱循環系）の比較を示し最適処理条件検討の経過を示す。また処理残渣を森林に還元するための洗浄効果（次亜塩素酸ナトリウム除去効果）検証実験の概要を示す。

Wet oxidation reduces weight of forestry biomass and the concentration of radioactive Cs therein. Radioactive Cs removed from the biomass is retained in the liquid phase (mixture of sodium hypochlorite and the ultrapure water) around the biomass and then gaseous Cs emission is not detected. Mechanical stirring method (turbulence and heat are given to the open system container) and the heat circulation method (mixing is given by heating the whole sealed bottle) were proposed and optimum operation conditions were explored. Aiming to return the residue, tendency of the removal of sodium hypochlorite from the residue via washing, also, was examined.

キーワード：湿式酸化，森林バイオマス，残渣の洗浄

Keyword : Wet Oxidation, Forestry Biomass, Washing of the Residue

③10:20- 石井秀樹（福島大学食農学類）

『放射性セシウムの汚染評価と計測スケールに関する考察』

Considerations on the Assessment of Radioactive Cesium Contamination and Measurement Scales

土壌表層の放射性セシウム分布には、フォールアウト直後の沈着状況による一次的偏在に加え、耕耘や人・動物による攪乱などに起因する二次的偏在が存在する。本研究では、このような不均一な分布を踏まえ、①直径 5cm コアサンプラーによる土壌採取、②土壌表層設置型 NaI シンチレーション計測器によるガンマ線スペクトル測定、③航空機モニタリングによる広域測定の 3 手法を比較した。各手法の計測特性と対象とする空間スケールの違いを整理し、放射性セシウム汚染の評価と計測スケールとの関係について考察した。

In addition to the primary spatial heterogeneity resulting from the initial deposition immediately after fallout, the distribution of radioactive cesium in surface soil exhibits secondary spatial heterogeneity caused by tillage and disturbances by humans and animals. Taking this heterogeneous distribution into account, this study compared three measurement methods: (1) soil sampling using a core sampler with a diameter of 5 cm, (2) gamma-ray spectrometry using a NaI scintillation detector placed directly on the soil surface, and (3) large-area measurements conducted through airborne monitoring. The measurement characteristics of each method and the differences in the spatial scales they represent were arranged, and the relationship between the assessment of radioactive cesium contamination and measurement scale was examined.

キーワード：放射性セシウム，分布の偏り，計測スケール

Keyword : Radioactive Cesium, Spatial Heterogeneity, Measurement Scale

④10:40- 小高慎太郎（東京大学大学院農学生命科学研究科）、石橋宙郎（東京大学大学院工学系研究科）

『ホップ栽培を通じた福島県飯舘村の地域活性化・関係人口創出』

Regional Revitalization and the Development of a Related Population through Hop Cultivation in Iitate Village, Fukushima Prefecture

東京大学飯舘村ホッププロジェクトは、東日本大震災・福島第一原発事故で被災した福島県飯舘村の震災復興を目指して活動している団体である。活動の軸は地域内交流の活性化と関係人口の創出であり、ホップ栽培を通じてこの課題に取り組んでいる。活動開始より 3 年目となった本年では、新たな取り組みとして収穫祭の企画、クラフトコーラをはじめホップの他用途の開拓、自動散水装置の導入への着手を行なった。

The University of Tokyo Iitate Village Hop Project is an organization working toward the recovery of Iitate Village, Fukushima Prefecture, which suffered damage from the Great East Japan Earthquake and the Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant accident. Its core activities focus on revitalizing local community interaction and creating connections with the region, tackling these challenges through hop cultivation. This year, the third since the project began, new initiatives included planning a harvest festival, exploring alternative uses for hops such as craft cola, and initiating the installation of an automatic irrigation system.

キーワード：ホップ，地域活性化，飯舘村

Keyword : Hop, Regional Revitalization, Iitate Village

⑤11:00- 木野凱平（東京大学）

『東大むら塾の飯舘村における活動について』

Activities of Todai Mura-juku in Iitate Village

東京大学の学生サークル東大むら塾の飯舘班は、2019 年より飯舘村での活動を始めた学生団体であり、農業や地域交流に関わる様々な活動を行ってきた。さらに、2022 年より行政区に対して取材を行い、その取材内容をもとに冊子を作成する行政区ずかんをはじめとした広報活動や学童との交流といった新たな活動を行ってきたが、我々の活動の内容と結果を整理することで、今後の活動のあり方について見つめていきたい。

The Iitate Team of Todai Mura-juku, a student organization at the University of Tokyo, began its activities in Iitate Village in 2019. Since then, the team has conducted a variety of activities related to agriculture and interaction with local residents. Since 2022, it has also undertaken new initiatives, including public relations activities such as the Gyoseiku Zukan (Illustrated Guide to Administrative Districts), a booklet created on the basis of interviews with residents and representatives of the village's administrative districts, as well as exchange activities with children attending local after-school care programs. By reviewing the content and outcomes of these activities, this study aims to examine the future direction of the team's activities in Iitate Village.

キーワード：飯舘村，東大むら塾，行政区ずかん

Keyword：Iitate Village, Todai Mura-juku, Gyoseiku Zukan(Illustrated Guide to Administrative Districts in Iitate)

⑥11:20- 溝口勝（東京大学大学院農学生命科学研究科）

『生成 AI に「復興農学とは何か」を尋ねる実験』

An Experiment in Asking Generative AI, “What Is Resilience Agriculture?”

近年、生成 AI の普及により研究 DX が進み、学術情報整理や論文作成の方法が変化している。本研究は「復興農学とは何か」を同一条件で複数の生成 AI に問い、回答内容と引用文献を比較した。その結果、AI の学習・検索基盤の違いにより概念理解や文献の正確性に差異が生じ、架空文献などの倫理的課題も確認された。以上から、復興農学を地域が再び幸福に営農できる力を育むレジリエンス農学として位置づけ、AI 利用には人間による厳密なファクトチェックと一次データ発信が不可欠であることを示した。

The rapid spread of generative AI has accelerated research digital transformation (DX), changing how academic knowledge is organized and scholarly texts are produced. This study investigates how generative AI systems interpret the concept of “Resilience Agriculture Science.” Multiple AI systems were asked the same question under identical conditions, and their responses and cited references were compared. The analysis revealed clear differences among systems due to variations in training data and search integration, affecting conceptual interpretation and the reliability of cited sources. Ethical issues, including hallucinated or biased references, were also observed. These findings suggest that Resilience Agriculture Science should be understood not merely as a set of restoration technologies but as a resilience-oriented discipline that supports disaster-affected regions in rebuilding sustainable and fulfilling agricultural livelihoods. While generative AI provides powerful support for research DX, its responsible use requires rigorous human-led fact-checking and the continuous dissemination of primary data.

キーワード：復興農学, 生成系 AI, 研究 DX

Keyword : Resilience Agriculture and Science, Generative AI, Research DX

⑦11:40-杉野弘明（山口大学国際総合科学部）

『災害復興期における自治体健康ナラティブの構造変容 —「広報いいたて」を対象としたナレッジグラフ分析』

Translating Well-being in Post-Disaster Governance: A Knowledge Graph Analysis of Municipal Narratives in Iitate

本研究は、福島県飯舘村の公式広報誌「広報いいたて」（2011 年以前～2026 年）を対象に、原子力災害後の復興過程において自治体が構築してきた健康ナラティブの構造的再編をナレッジグラフ分析により解明するものである。広報を単なる情報媒体ではなく、政策的意味生成の場として位置づけ、避難期、帰還期、拠点解除後という制度的フェーズ間で、健康・フレイル・生活再建・社会的つながりに関する概念連関の変容を比較する。

This study investigates the structural reconfiguration of municipal health narratives during the post-nuclear disaster recovery process in Iitate Village, Fukushima, through knowledge graph analysis of the official public relations bulletin Koho Iitate. Rather than treating public relations materials as mere information media, the study conceptualizes them as sites of policy meaning-making. By comparing institutional phases (evacuation, return, and post-reopening of restricted areas), it examines how conceptual linkages among health, frailty, livelihood reconstruction, and social connectedness have transformed over time. Through this relational modeling, the research aims to clarify how municipalities discursively reconstruct health within shifting recovery contexts.

キーワード：ナレッジグラフ, ウェルビーイング, ナラティブ

Keyword : Knowledge Graph, Well-being, Narrative

⑧12:00-怒和桃子 (山口大学国際総合科学部)

『福島県およびフランス・グラヴリーヌでのフィールドワークに基づく事前イメージと実見の差異と意識変容の過程の質的分析』

The qualitative analysis on the differences between the previous regional image and actual experiences and the process of changing consciousness based on the field work in Fukushima, Japan, and Graveline, France

2011 年の東日本大震災以降、原子力発電所と立地地域の関係は社会的再編の途上にある。また、除染土処分を全国的課題として共有する現在、外部的に構築された地域イメージと現地経験との差異が、いかに認識形成や態度変容に作用するかが重要な論点となる。本発表では、福島県およびフランス・グラヴリーヌでのフィールドワークに基づき、事前イメージと実見の差異と、それがもたらした意識変容の過程を質的に分析した結果を報告する。

After the Fukushima disaster in 2011, the relationship between a nuclear power plant and the surrounding regions had to be reconstructed in society. In addition, the final disposal of decontaminated soil is currently recognized as a huge task throughout Japan. Therefore, it is inevitable to discuss how we can change regional images through actual field experiences. I will present the differences between the previous images and the practical experiences, based on the field work in Fukushima, Japan, and Graveline, France. Furthermore, the result of the qualitative analysis on the process of changing consciousness that was affected by these experiences will be reported.

キーワード：地域イメージ, グラヴリーヌ, 意識変容

Keyword : Regional Image, Graveline, Process of Changing Consciousness

⑨12:20- 加藤泰熙・石井秀樹・福島慶太郎（福島大学食農学類）

『阿武隈川沿い河川竹林の管理状況と水防林としての可能性および課題』

Current Management of Riparian Bamboo Forests along the Abukuma River: Potential and Challenges for Their Use as Flood Control Forests

竹の水防林は、根系による河岸侵食の抑制や稈による流速低減などの機能を有する一方、放置竹林は倒伏や流木化により洪水リスクを高める。本研究では、阿武隈川の伊達崎橋から丸森橋までを対象に、竹林の種類と管理状況を調査し、水防林としての活用可能性を検討した。その結果、マダケとモウソウチクが9割以上を占め、管理された竹林はアクセスの良い場所に、放置竹林は斜面地など管理困難な場所に集中していた。これらを踏まえ、「先止め」処理や河川を利用した竹材搬出など、省力的で持続可能な管理方策を提案した。

Bamboo flood control forests can suppress riverbank erosion through their root systems and reduce flow velocity through their culms. However, unmanaged bamboo stands may increase flood risk when culms fall and are swept downstream as floating debris. In this study, we surveyed the species composition and management status of bamboo stands along the section of the Abukuma River extending from Danzaki Bridge to Marumori Bridge and examined their potential use as flood control forests. The results showed that more than 90% of the surveyed bamboo stands consisted of either Japanese timber bamboo or moso bamboo. Managed bamboo stands were concentrated in readily accessible locations, whereas unmanaged stands were concentrated on slopes and other difficult-to-manage sites. Based on these findings, we proposed labor-saving and sustainable management measures, including culm-top cutting (sakidome) and river-based transport of harvested bamboo.

キーワード：竹林, 水防林, 省力型管理

Keyword : Bamboo Forests, Flood Control Forests, Labor-Saving Management

2025年度 復興農学会 研究会「公開シンポジウム」

会場・ZOOMによる開催・参加費無料！

東日本大震災後の産業復興と地域の持続可能性

基調講演 『岩手県の水産業の復興と現状について』

令和8年 3月20日(金) 14:00~15:50
コラッセふくしま 4階402会議室

東日本大震災から15年が経過しました。東日本の各地で、地震・津波・原子力災害の被害の様相は、それぞれ異なりますが、地域の復興と産業復興が、十分な成果を上げたのか、課題はどこにあるのか、総括と検証をする時期にきています。またその反省や教訓を次世代に引き継ぐべき時期にきています。本シンポジウムは、岩手大学の田村直司先生をお迎えし、「岩手県の水産業の復興と現状」について基調講演して頂き、復興農学に引き付けながらその課題を学際的に議論する場と致します。



基調講演 田村 直司 氏

(岩手大学 三陸水産研究センター客員教授)

1984年 東京水産大学(現、東京海洋大学)に進学。
1889年 岩手県庁入庁
2002年 水産庁(2年間、出向)
2010年 岩手県庁 退職
2011年 岩手大学産学官連携専門職員 就任
2024年 岩手大学 退職
2025年 岩手大学三陸水産研究センター客員教授 就任

Zoomでご参加の方は、下記のいずれかの方法でご参加ください。(申込不要)

● URLから

<https://us06web.zoom.us/j/87056945590?pwd=lcYgrBP3bo8L8GSbNvabO3S63iZS5m.1>

ミーティング ID: 870 5694 5590
パスコード: 775262

● 二次元コードから



問い合わせ先: 復興農学会 研究企画委員 石井秀樹(福島大学)

ishii.h@agri.fukushima-u.ac.jp

2025年度 復興農学会『研究会・総会』プログラム

2026年3月20日(金) コラッセふくしま 4階402会議室

I. 口頭発表 9:40-12:40

- ①9:40- 後藤慎吾、磯洋一（古河産業株式会社）、原田茂樹（福島大学食農学類）
『毛管ドレインベルトの圃場（転換畑）での排水効果の確認
～復興圃場の排水管理による効率化にむけて～』
- ②10:00- 原田茂樹、松木志帆、平野昂琉、（福島大学食農学類）、脇山義史（福島大学環境放射能研究所）
『森林バイオマスの湿式酸化法による減量とCs低濃度化：攪拌法と密閉容器法』
- ③10:20- 石井秀樹（福島大学食農学類）
『放射性セシウムの汚染評価と計測スケールに関する考察』
- ④10:40- 小高慎太郎（東京大学大学院農学生命科学研究科）、石橋宙郎（東京大学大学院工学系研究科）
『ホップ栽培を通じた福島県飯館村の地域活性化・関係人口創出』
- ⑤11:00- 木野凱平（東京大学）
『東大むら塾の飯館村における活動について』
- ⑥11:20- 溝口勝（東京大学大学院農学生命科学研究科）
『生成AIに「復興農学とは何か」を尋ねる実験』
- ⑦11:40- 杉野弘明（山口大学国際総合科学部）
『災害復興期における自治体健康ナラティブの構造変容
ー「広報いいたて」を対象としたナレッジグラフ分析』
- ⑧12:00- 怒和桃子（山口大学国際総合科学部）
『福島県およびフランス・グラヴリーヌでのフィールドワークに基づく
事前イメージと実見の差異と意識変容の過程の質的分析』
- ⑨12:20- 加藤泰熙・石井秀樹・福島慶太郎（福島大学食農学類）
『阿武隈川沿い河川竹林の管理状況と水防林としての可能性および課題』

口頭発表、ポスター発表への
ご参加は、参加費2500円です。

II. ポスター発表 13:25-13:55

13:25 ポスターセッション

- ①『飯館村実地研修が高校生の復興意識に与える影響の分析』
大島健琉a、大豆生田隼a、中山琰鶴a、宇田川理奈b、白井美翔b、長凜華b、室井光輝b、加藤信行a
- ②『高校生を対象とした復興教育の実態と意識に関する調査』
相田稜太a、白井修人a、加藤信行a 『高校生を対象とした復興教育の実態と意識に関する調査』
- ③『高校生における農業のイメージと実態に関する研究』
後藤敦哉a、開沼博c 『高校生における農業のイメージと実態に関する研究』
(a:大田原高校、b:大田原女子高校、c:東京大学大学院情報学環)

III. 公開シンポジウム 14:00-15:50 (参加費:無料)

『東日本大震災後の産業復興と地域の持続可能性』

基調講演 『岩手県の水産業の復興と現状について』

田村直司氏（岩手大学三陸水産研究センター客員教授）

モデレーター：丹野史典氏（岩手大学研究・地域連携部 産学官連携専門職員）

【ZOOMリンク】

<https://us06web.zoom.us/j/87056945590?pwd=ICygrBP3bo8L8GSbNvabO3S63iZS5m.1>

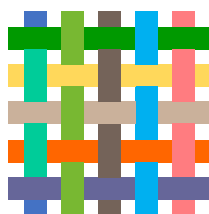
ミーティング ID: 870 5694 5590

パスコード: 775262

IV. 総会 16:00-17:00

【連絡先】

復興農学会 研究企画委員 石井 秀樹（福島大学 ishii.h@agri.fukushima-u.ac.jp）



復興農学会

<http://fukkou-nougaku.com/>

復興農学会 総会 議事

日時 2026年3月20日（金・祝）
15時30分（シンポジウム終了後）～17時00分（予定）

会場 コラッセふくしま（福島市）

議事

【報告事項】

- I. 2025年度会務報告
- II. 2025年度会計報告
- III. その他

【審議事項】

- I. 2026年度事業計画（案）
- II. 2026年度予算（案）
- III. その他

【その他】

- I. その他

【報告事項】

I. 2025年度会務報告

1. 幹事会

幹事会が下記の7回開催された。本学会の運営、学会誌の編集・発行について議論・調整し、知見・実績の共有などを行った。

2025年4月8日（火）、5月13日（火）、6月10日（火）、8月5日（火）、10月14日（火）、12月9日（火）

2026年2月10日（火）

2. 被災地見学会

下記により2025年度被災地見学会（熊本）を実施した。

復興農学会 2025年度現地見学会（熊本）について

日程 2025年12月13日（土）～14日（日）

場所 東海大学農学部（阿蘇くまもと臨空キャンパス）、他

行程

12月13日（土）：13時00分 熊本空港 集合

- ・震災資料館（KIOKU）見学
- ・東海大学農学部（阿蘇くまもと臨空キャンパス）見学
- ・講演：「東海大学農学部の震災対応と復興の歩み」（東海大学農学部「岡本智伸氏」）
- ・懇親会

12月14日（日）：8時30分 ベッセルホテル熊本空港 発、8時50分 肥後大津駅南口 発

・現地生産者見学（訪問先は予定）

1, 阿蘇健康農園（イチゴの観光農園を中心に経営）

2, 西原村山田牧場（乳牛生産農家）

見学終了後（13時00分ごろ）熊本空港で解散

参加費 1人 6,000円

参加者 7名

3. 総会

日時 2026年3月20日（金・祝）15時30分（シンポジウム終了後）～17時00分

会場 コラッセふくしま（福島市）

4. 研究会

日時 2026年3月20日（金・祝）9時40分～12時40分

主催 復興農学会第5回研究会運営委員会（委員長：新田 洋司 福島大学教授）

会場 コラッセ福島（福島市）

5. シンポジウム

テーマ	東日本大震災後の産業復興と地域の持続可能性
日時	2026年3月20日（金・祝）13時30分～15時30分
主催	復興農学会第5回研究会運営委員会（委員長：新田 洋司 福島大学教授）
会場	コラッセふくしま
基調講演	田村 直司 氏（岩手大学三陸水産研究センター 客員教授） 「岩手県の水産業の復興と現状について」
モデレーター	丹野 史典 氏（岩手大学研究・地域連携部 産学官連携専門職員）

6. 会員数および入・退会等状況

会員数

	研究者	その他	計
大学等	86 (-1)	0 (-1)	86 (-2)
法人等	3 (0)	1 (-1)	4 (-1)
省庁・都道府県・自治体等	3 (0)	1 (0)	4 (0)
企業・団体等	7 (+3)	1 (0)	8 (+3)
その他	0 (0)	0 (0)	0 (0)
計	99 (+2)	3 (-2)	102 (0)

注：2022年度以降の年会費納入者（うち2名は2024年度限りで退会（上表に含まれていない））。重複なしの実数。（ ）内は前年比。2026年3月9日現在。

7. 学会誌「復興農学会誌」の編集・発行

(1) 発行

2025年7月31日 第5巻2号発行。巻頭言、原著論文3報、現場からの報告1報、第4回研究会講演要旨、他

2026年1月31日 第6巻1号発行。巻頭言、原著論文2報、現場からの報告4報、第5回研究会開催案内、他

(2) 審査

原著論文は2名が査読。

審査中の原著論文★報（2026年★月★日現在）。

(3) 編集委員会

委員長	内田 修司 教授（福島工業高等専門学校）
副委員長	安達 俊輔 准教授（東京農工大学）
委員	杉野 弘明 講師（山口大学）
委員	Djedidi Salem（福島大学）

8. 幹事・監事、会長・副会長の選出

(1) 幹事・監事の選出

幹事（10名）および監事（2名）の選出について、2025年3月16日（日）～28日（金）に、Googleフォームによる選挙を実施された（選挙管理委員会 選挙管理委員長：佐伯 爽 講師（東海大学））。3月29日（土）に開票し、下表の会員が選出された。

(2) 会長・副会長の選出

2025年4月4日（金）にWebで幹事会（新幹事・新監事）が開催され、会長・副会長の選出についてGoogleフォームによる選挙が実施され、投票後、開票された（選挙管理委員会 選挙管理委員長：佐伯 爽 講師（東海大学））。下表の会員が選出された。

幹事	会長	溝口 勝（東京大学）	（第6条第1項・第2項）
	副会長	新田 洋司（福島大学）	（第6条第1項・第2項）
		登尾 浩助（明治大学）	
		（幹事長）新田 洋司（福島大学）	（第6条第1項・第4項）
	学会誌担当	内田 修司（福島工業高等専門学校）（主任） 杉野 弘明（山口大学） 安達 俊輔（東京農工大学） Djedidi Salem（福島大学）	機関誌編集
	企画担当	石井 秀樹（福島大学）（主任） Djedidi Salem（福島大学） 横山 正（福島大学） 佐伯 爽（東海大学）	シンポジウム・講演会・研究例会の企画
	渉外担当	登尾 浩助（明治大学）	他学会・自治体・会社・団体等との連携
	教育研究資料担当	杉野 弘明（山口大学）（主任） 大川 泰一郎（東京農工大学）	成果・資料の収集・共有化
監事		内田 修司（福島工業高等専門学校） 生源寺 真一（日本農業研究所）	（第6条第1項・第5項）
事務局員		（今後検討）	
アドバイザーボード		（今後検討）	

II. 2025年度会計報告

(2025年4月1日～2026年3月31日 (2026年3月10日現在))

1. 収入

項目	金額 (円)	備考
前年度繰越金	68,984	
会費	86,000	2025年4月1日～2026年3月31日納付者 (2026年3月9日現在) のべ43名 (内訳: 2023年度分: 2名、2024年度分: 3名、2025年度分: 37名、2026年度分: 1名)
第4回研究会・総会運営委員会より返金	81,644	
広告	0	
計	234,628	

2. 支出

項目	金額 (円)	備考
日本農学会2025年度分担当金	38,060	分担金37,400円・振込手数料660円
謝礼	6,192	現地見学会 (2025年12月13日) みやげ (2個)
第5回研究会・総会補助	50,000	コラッセ福島 (福島大学) で2026年3月20日開催
事務経費	8,880	謝金 (名簿管理・入力補助) @1,110円×8時間
次年度繰越金	133,496	
計	234,628	

III. 2025年度会計監査報告

Sat, 14 Mar 2026 06:54:02 +0900:

2025年度会計監査報告について

復興農学会の2025年度の会計処理について、適正に実施されていると判断いたします。

関連するコメント

1) 2025年度の出納簿と2025年度の会計関係書類について確認いたしましたが、金額と表記法のいずれについても問題ないと判断しております。

2) 会計監査としてのコメントではないですが、年度内の会費納入者が延べで43名にとどまっている点は気になります。2026年3月9日現在の会員数102名の半数以下で、前年度よりも減少しているようです。

生源寺眞一

日本農業研究所

Thu, 12 Mar 2026 02:40:27 +0000:

2025年度の会計監査を実施いたしました。収支決算書および関係帳簿、証拠書類を精査いたしました結果、いずれも正確かつ適正に処理されていることを確認いたしました。ここに報告いたします。

2026年3月12日 会計監査 内田修司(福島高専)

IV. その他

【審議事項】

I. 2026年度事業計画（案）

1. 幹事会

原則、偶数月に開催予定。

2. 総会

第6回研究会開催時に開催予定。また、必要により開催。

3. 研究会

開催予定（2027年3月ごろを予定）。

4. シンポジウム

第6回研究会で開催時に開催予定。また、必要により開催。

5. 会員の拡大・勧誘について

本学会は、目的に賛同する市民、教育・研究関係者等を個人会員とし、目的に賛同する教育・研究機関、企業、団体、自治体等を団体会員としている。会員の拡大および勧誘の活動をお願いしたい。

6. 学会誌「復興農学会誌」の編集・発行

2026年7月（第6巻2号）、2027年1月（第7巻1号）に発行予定。

委員長	内田 修司 教授（福島工業高等専門学校）
副委員長	安達 俊輔 教授（東京農工大学）
委員	杉野 弘明 講師（山口大学）
委員	Djedidi Salem 研究員（福島大学）

7. 日本学術会議協力学術研究団体への登録申請について

2021年2月16日付けで登録申請し、同3月14日付けで追加書類を提出したが、登録とはならなかった。2024年度に再度登録申請を検討していたが、要件である会員数（100名以上）が十分ではなく申請を見送っていた。2026年度に再度、登録申請予定。

II. 2026年度予算（案）

（2026年4月1日～2027年3月31日）

1. 収入

項目	金額（円）	備考
前年度繰越金	133,496	
会費	220,000	110名（2026年3月9日現在の会員数102名）
広告	25,000	1社
計	378,496	

2. 支出

項目	金額（円）	備考
日本農学会分担金	38,060	
ホームページ運用	100,000	学会ホームページの運用
事務経費	60,000	リモート会議等システムライセンス、Wi-Fi関係機器、文具、用紙、他
第6回研究会・総会開催補助	50,000	
予備費	130,436	
計	378,496	

III. その他

【その他】

I. 役員（2025～2026年度）

2025年4月8日（火）幹事会確認

幹事	会長	溝口 勝（東京大学）	（第6条第1項・第2項）
	副会長	新田 洋司（福島大学）	（第6条第1項・第2項）
		登尾 浩助（明治大学） （幹事長）新田 洋司（福島大学）	（第6条第1項・第4項）
	学会誌担当	内田 修司（福島工業高等専門学校）（主任） 杉野 弘明（山口大学） 安達 俊輔（東京農工大学） Djedidi Salem（福島大学）	機関誌編集
	企画担当	石井 秀樹（福島大学）（主任） Djedidi Salem（福島大学） 横山 正（福島大学） 佐伯 爽（東海大学）	シンポジウム・講演会・研究例会の企画
	渉外担当	登尾 浩助（明治大学）	他学会・自治体・会社・団体等との連携
	教育研究資料担当	杉野 弘明（山口大学）（主任） 大川 泰一郎（東京農工大学）	成果・資料の収集・共有化
監事		内田 修司（福島工業高等専門学校） 生源寺 真一（日本農業研究所）	（第6条第1項・第5項）
事務局員		（今後検討）	
アドバイザーボード		（今後検討）	

以上

復興農学会 会則

2020 年 6 月 29 日制定

(名称)

第 1 条 本会は、復興農学会と称する。国内・外における自然災害・原子力災害等からの復旧・復興から得た農学・農業（農林水産業等）分野における知見・技術を、広く国内・外に発信していく学術的な非営利組織である。

(目的)

第 2 条 本会は、災害等からの復旧・復興に農学・農業分野で次の諸点で寄与することを目的とする。

- (1) 市民、教育・研究機関、企業、団体、自治体等の相互間の学術・技術・教育等の交流を進めること。
- (2) 市民、教育・研究機関、企業、団体、自治体等が復旧・復興にかかる事業で培った学術・技術・教育等の成果を「復興農学」として体系化し、深化と継続をはかること。
- (3) 市民、教育・研究機関、企業、団体、自治体等が学術・技術・教育等の成果を交え、広く国内・外で復旧・復興支援活動を進めること。

(事業)

第 3 条 本会は、上記の目的を達成するため、次の事業を行う。

- (1) 教育・研究活動の成果の共有
- (2) 共同事業の企画・推進
- (3) 研究会、シンポジウム等の開催
- (4) 教育・研究資料の収集・配布
- (5) その他、本会の目的を達成するために必要な事業

(会員)

第 4 条 本会の会員は、個人会員および団体会員で構成する。

- (1) 個人会員は、本会の目的に賛同する市民、教育・研究関係者等の個人とする。
- (2) 団体会員は、本会の目的に賛同する教育・研究機関、企業、団体、自治体等とする。

(経費および会費)

第 5 条 本会は事業を遂行するため、会員が下記の会費を前納するとともに、別途寄附金を受ける。

- (1) 個人会員 年額 2,000 円
- (2) 団体会員 年額 4,000 円

(役員)

第 6 条 本会に次の役員を置く。

幹事 若干名
監事 2 名

- 2 幹事のうちから会長 1 名、副会長若干名を互選する。
- 3 会長は本会を代表し、その業務を処理する。

復興農学会 会則

- 4 副会長は、会長を補佐し、会長に事故あるときはその職務を代理し、会長が欠けたときはその職務を行う。副会長のうち1名は幹事長として、事務局業務を行う。
- 5 監事は、幹事の職務を監査し、事業および会計とそれらの報告等を監査する。
- 6 役員の任期は2年とする。ただし、再任を妨げない。

(総会)

第7条 総会は毎年1回会長が召集する。総会においては会則の改正、事業計画、予算および決算の承認、その他重要な事項を審議する。

- 2 総会の議決は出席者の多数決による。

(幹事会)

第8条 事業の円滑な運営を図るため、幹事会を設ける。

- 2 幹事会は、幹事をもって構成する。
- 3 幹事会は、必要に応じて会長が招集する。
- 4 幹事会は、会の重要事項について審議・決定し、執行する。
- 5 幹事会の議決は出席者の多数決による。

(事業および会計年度)

第9条 本会の事業および会計年度は、4月1日に始まり、3月31日に終わる。

(事務所)

第10条 本会の事務所は、会長の所属機関（または福島大学食農学類）に置く。なお、本会の総務の一部は福島大学食農学類が担当する。

福島大学食農学類所在地 〒960-1296 福島市金谷川1 電話番号 024-548-8364

附則

この会則は、2020年6月29日から施行する。

復興農学会 幹事および監事選考要領

2023年3月18日 制定

(幹事の業務)

第1条 本会は会則第6条にしたがい幹事を置く。幹事の業務は学会誌担当、企画担当、渉外担当、教育研究資料担当とする。幹事の任期は2年とし、任期始期は本会の事業年度と同じとする。

(幹事の選考)

- 第2条 幹事は会員の中より会員による選挙によって選考する。当面は10名とする。また、会長が必要と認め幹事会で承認された場合には、選挙で選出される幹事数の1割程度を限度として幹事を追加することができる。幹事は監事と兼ねることができる。
- 2 選挙はオンラインシステムで行う。会員は、オンライン上に提示された会員簿の中から当面は10名を選び、その名前を連記して投票する。ただし、同一人に2票以上を投票することはできない。なお、同一人に2票以上が投票された場合は1票と数える。
 - 3 得票数が同じ場合は年長順により順位を定める。
 - 4 幹事にその任期中に欠員が生じた場合は次点者を繰り上げる。
 - 5 選挙は事務局員が管理し、開票は事務局員により行う。

(監事の業務)

第3条 本会は会則第6条にしたがい監事を置く。監事の任期は2年とし、任期始期は本会の事業年度と同じとする。

(監事の選考)

- 第4条 監事は会員の中より会員による選挙によって選考し、2名とする。監事は幹事と兼ねることができる。
- 2 選挙はオンラインシステムで行う。会員は、オンライン上に提示された会員名簿の中から2名を選び、その名前を連記して投票する。ただし、同一人に2票以上を投票することはできない。なお、同一人に2票以上が投票された場合は1票と数える。
 - 3 得票数が同じ場合は年長順により順位を定める。
 - 4 幹事にその任期中に欠員が生じた場合は次点者を繰り上げる。
 - 5 選挙は事務局員が管理し、開票は事務局員により行う。

附則

この会則は、2023年3月18日から施行する。

復興農学会 学会賞規程

2023年3月18日 制定

(学会賞等)

- 第1条 本会は、国内・外における自然災害・原子力災害等からの復旧・復興から得た農学・農業（農林水産業等）分野における知見・技術を広く国内・外に発信し、学術、地域貢献等の活動において顕著な業績（論文、著書、資料等）をあげた会員に対して復興農学会賞を贈り、これを表彰する。業績は公表されるものとする。
- 2 本会は復興農学にかかる技術開発・普及・啓蒙に顕著な業績（論文、著書、資料等）をあげた会員に対して復興農学会技術賞を贈り、これを表彰する。業績は公表されるものとする。
 - 3 本会は復興農学にかかる学術等の発展に寄与する優れた業績（論文、著書、資料等）を復興農学会誌に発表し、さらに将来の発展を期待しうる会員に対し復興農学会学術奨励賞を贈り、これを表彰する。業績は公表されるものとする。ただし、会員の年齢は授賞年度の4月1日において満39歳以下とする。
 - 4 本会は復興農学会誌に発表された論文等の中で優れた業績の著者である会員に対して復興農学会論文賞を贈り、これを表彰する。業績は公表されるものとする。
 - 5 本会は研究会における優秀な発表に対して復興農学会優秀発表賞を贈り、これを表彰する。ただし、受賞者は授賞年度の4月1日において満35歳以下とする。
 - 6 復興農学会賞、復興農学会技術賞、復興農学会学術奨励賞、復興農学会論文賞、復興農学会優秀発表賞は、幹事会における審議にもとづいて会長がこれを決定する。ただし、年度により候補者、受賞者の該当がない場合もある。

(貢献賞)

- 第2条 本会は会務その他諸事業の遂行にあたり多大な貢献をした学会関係者に復興農学会貢献賞を贈り、これを表彰する。本賞は幹事会における審議にもとづいて会長がこれを決定する。

附則

この会則は、2023年3月18日から施行する。

復興農学会 会誌編集委員会規程

2020 年 10 月 5 日 制定

(編集委員)

第 1 条 本会に会誌編集委員 (以下「編集委員」という。)を置く。任期は 2 年とする。ただし、再任を妨げない。編集委員は会長がこれを委嘱する。

(編集委員会の組織)

第 2 条 復興農学会は会誌発行のため編集委員会を組織する。

(編集委員会)

第 3 条 会長は、編集委員の中から会誌編集委員長 (「編集委員長」という。)を委嘱する。

(編集委員会の職務)

第 4 条 編集委員会は、会誌の内容、体裁、投稿規定、原稿執筆規定、投稿原稿の採否・審査、原稿の依頼など、会誌の編集・発行に関する業務・運営にあたる。編集委員会の業務・運営経過は、これを非公開とする。

第 5 条 編集委員長は、必要に応じ編集委員会を招集する。

復興農学会 会誌投稿規程

2020 年 10 月 5 日 制定
2024 年 4 月 30 日 一部修正

I. 総則

1.復興農学会誌は、国内・外における自然災害・人為災害（原子力災害等）からの復旧・復興から得た農学・農業（農林水産業等）分野における知見・技術を、原著論文・総説や解説記事として広く国内・外に発信する。本会誌は年2回（1月と7月）に発行する。

2.（投稿資格）筆頭著者または **Corresponding author** は、復興農学会第4条に規定する会員に限る。ただし依頼原稿については、その限りでない。

3.（著作権）本誌に掲載された論文、総説、解説等についての著作権は復興農学会に属する。

II. 原稿の種類

4.（投稿原稿） 原著論文、総説、解説、オピニオン、現場からの報告、ニュース、資料、その他を設ける。

①原著論文

原著論文は、報文およびノートの種類とし、いずれも他誌に未発表のものに限る。

a) 報文：学術的で新規な知見、独創的な考察、あるいは価値ある事実を含むもの。

b) ノート：新しい事実や、研究方法の改良などを含む短いもの。

原著論文の投稿は会員に限る。

②総説

研究の進歩の状況、現状、将来への展望などをまとめたもの、あるいは国内・外における自然災害・人為災害（原子力災害等）からの復旧・復興から得た農学・農業（農林水産業等）分野における知見・技術を「復興知」としてまとめたもの。

会員による投稿が原則であるが、編集委員会が企画して、投稿依頼をする場合がある。

③解説

基本的または応用的主題を分かり易く解説したもの、あるいは国内・外における自然災害・人為災害（原子力災害等）からの復旧・復興から得た農学・農業（農林水産業等）分野における知見・技術を「復興知」として分かりやすく解説したもの。

会員による投稿が原則であるが、編集委員会が企画して、投稿依頼をする場合がある。

④オピニオン

国内・外における自然災害・人為災害（原子力災害等）からの復旧・復興に関する提言、学会活動に関する意見発表、その他。

会員・非会員ともに投稿可能であるが、編集委員会の査読を受け、本学会の規定に沿わない場合は受理されない場合もある。

⑤現場からの報告

自然災害・人為災害（原子力災害等）からの復旧・復興に関する現場の人の活動、現場で活動する人の声、自然災害・原子力災害等からの復旧・復興に関する現地検討会（小中学校やその他の教育機関等での活動の紹介も含む）の報告等。

会員・非会員ともに投稿可能であるが、編集委員会の査読を受け、本学会の規定に沿わない場合は受理されない場合もある。

⑥ニュース

自然災害・人為災害（原子力災害等）からの復旧・復興に関するニュース等

会員・非会員ともに投稿可能であるが、編集委員会の査読を受け、本学会の規定に沿わない場合は受理されない場合もある。

⑦資料

自然災害・人為災害（原子力災害等）からの復旧・復興に関する調査、統計、写真等、資料的価値のあるもの。

会員・非会員ともに投稿可能であるが、編集委員会の査読を受け、本学会の規定に沿わない場合は受理されない場合もある。

⑧その他

学会記事等、学会活動に必要なもの。

5.（依頼原稿） 国内・外における自然災害・人為災害（原子力災害等）からの復旧・復興から得た農学・農業（農林水産業等）分野における知見・技術情報を会員に提供するために、編集委員会が企画、依頼をする。依頼原稿の種類は総説、解説とする。

III.原稿の作成、送付および取り扱い

6.（原稿ファイル） 原稿は、本規程および別に定める原稿作成要領（別に定める）に従い、ワープロソフトや図表ソフトを使って作成する。

7.（原稿の送付） 原稿の送付は所定のウェブサイトから行う。原稿の基本情報を入力した後、上述のファイルを送信する。

8.（原稿受付日および掲載受理日） 原稿受付日は、所定のウェブサイトから送信が完了した年月日、掲載受理日は原稿の掲載が編集委員会によって受理された日とする。

9.（原稿の規定枚数） 原稿の長さは原則として図表を含めて以下のページ数以内とする。報文 10、ノート 5、総説 7、解説 6、オピニオン 4、現場からの報告 4、ニュース 4、資料 4、オピニオン・ニュース・資料および依頼原稿のページ数は指定することがある。

IV.審査

10.（原稿の採否） 原稿の採否は編集委員会（編集委員会規程に記載）が決定する。

編集委員会は投稿された原著論文に関しては 2 名の査読委員を選定し、厳格に査読を行う。投稿された原著論文の審査結果が分かれた場合は、第 3 人目の査読委員を立てて、その掲載の有無を判定する。

11.（内容の訂正） 編集委員は内容、構成および字句の修正を著者に要求することがある。また、採用が決定した原稿内容を著者が変更する場合は、編集委員会の承諾を得なければならない。

12.（遅延原稿の整理） 著者に対し訂正を求めた原稿が返却の日より 2 カ月以内に訂正・送付されない場合は取り下げとみなされることがある。

V. 著者校正

13. 著者校正は 1 回とする。校正は印刷上の誤りの訂正にとどめ、文章等、内容の変更を認めない。

VI.投稿料

14.（投稿料） 投稿原稿の投稿料は、無料とする。

15.（問い合わせ） 会誌編集に関する問い合わせは下記あてのこと。

復興農学会編集委員会 内田 修司（福島工業高等専門学校）

メールアドレス：uchidas@（アドレス@以下 → fukushima-nct.ac.jp）

復興農学会 会誌原稿作成要領

2020 年 10 月 5 日 制定

1. 原稿の順序

(1) 原著論文（報文、ノート）、総説、解説、オピニオン、現場からの報告、ニュース、資料、その他
初めに和文と英文で表題、著者名、和文要旨、和文のキーワード、次に英文要旨、英文のキーワードを記載する。

1 ページ目の最下行にテキストボックスを置き、その中に表を組んで罫線を上だけに設置する。本文から 1mm 以上空ける。両端揃えで 8pt、行間は固定値 11pt とする。

この枠内に和文の所属、英文の所属を記載する。和文と英文の間で改行する。英語表記は斜体とする。なお、著者が外国語圏に所属している場合は和文所属部分を外国語で記述してもよい。改行後、連絡著者（corresponding author）のメールアドレスを記載する。

本文の緒言は英文要旨から 1 行あけて始め、ついで、材料と方法、結果、考察（または、結果と考察）、謝辞（必要な場合）、引用文献の順に記載し、そのあとに図表を付ける。

当該論文に係る事業名（経常研究、科研費、その他の研究資金等の制度名）は謝辞に記載する。謝辞、引用文献がない場合は記載不要とする。

(2) 依頼原稿および非会員による原稿（総説、解説、オピニオン、現場からの報告、ニュース、資料）は原著論文に準じて原稿を記載する。

2. 原稿の表記、記載文字・記号等

(1) 本文が和文の場合

- ・原稿は「Microsoft Word」で作成する。それによりがたい場合は研究会事務局等に相談する。
- ・用紙の大きさは A4 判、上下左右に 25mm 以上の余白をとる。原則として 1 ページ 51 行、1 行 50 文字とする。査読原稿には、ページごとに行番号を、各ページの中央下にページ番号を付ける。本文と図表を 1 つの PDF ファイルにまとめる。査読終了後、受理原稿に関して修正が終了した原稿に関しては行番号を削除する。
- ・和文のフォントは MS 明朝（10.0pt）、英文のフォントは Times New Roman（10.0pt）を使う。文字を太字にする場合は「**ボールド**」を、斜字体は「*イタリック*」を、文字を下付きに配置する場合は「_{下付き文字}」を、上付きに配置する場合は「^{上付き文字}」を使う。
- ・和文は全角文字で入力する。なお、英字およびアラビア数字（0, 1, …, 9）は半角とする。
- ・句読点・括弧は全角の「、（コンマ）」、「。（まる）」、「（括弧）」とする。また、「・」、「?」、「～」、「%」も全角とする。
- ・「X」と「×」、「一」と「ー」、「一」と「ー」、「1」と「l」などを区別して入力する。

(2) 本文が英文の場合

- ・原稿は「Microsoft Word」で作成する。それによりがたい場合は学会事務局等に相談する。
- ・フォントは Times New Roman（10pt）を使う。文字を太字にする場合は「**ボールド**」を、斜字体は「*イタリック*」を、文字を下付きに配置する場合は「_{下付き文字}」を、上付きに配置する場合は「^{上付き文字}」を使う。
- ・英文はアラビア数字（0, 1, …, 9）を含めて半角文字で入力する。
- ・句読点・括弧は半角の「、（コンマ）」、「.（ピリオド）」、「（括弧）」とする。

3. 表題、副表題、著者名、所属機関、受理日

(1) 全ての原稿表題は 16pt で記載し、原則として主題と副題に分けない。分けるときの副題は 10.5pt でその下に記載する。

(3) 著者名の右側に「1」のように番号をつけ、1 ページ目の最下行にテキストボックスを置き、その中に表を組んで罫線を上だけに設置する。本文から 1mm 以上空ける。両端揃えで 8pt、行間は固定値 11pt、和文と英文の間で改行。英語表記は斜体とする。なお、著者が外国語圏に所属している場合は和文所属部分を外国語で記述してもよい。改行後、連絡著者（corresponding author）のメールアドレス（投稿後、数年間は使い続けられるもの）を記述する。すべて半角で、コロン（:）のあとに半角スペースを挿入する。ハイパーリンクにしないこと。

なお、組織等に所属しない著者等（個人、農家、高校生等）からの投稿の場合、可能な場合連絡先を記載する

¹△△県整備部都市計画課 ²〇〇大学工学部 ³College of Agriculture, University of Kaigai

¹ Maintenance Division City Planning Section, Sankaku Prefectural Government ² Faculty of Engineering, Marumaru University ³ College of Agriculture, University of Kaigai

Corresponding Author*: hanako_keikaku@eng.marumaru.ac.jp

年 月 日受理

4. 要旨、キーワード

- (1) 要旨は改行しない。また図表や文献を引用しない。文字数は600 以内とする。なおノートでは100 文字程度とする。
- (2) キーワードは50 音順とし、5 語までとする。検索に使われやすい用語を用いる。

5. 英文の表題、要旨、キーワード

- (1) 英文表題 (Title) は10.5pt、折り返したらセンタリングする。英文副題は9pt とする。表題も副題も頭は大文字 (前置詞等を除く) とする。
- (2) 要旨 (Abstract) は和文の要旨と同様の形式とし、230 語以内とする。なおノートでは50 語程度とする。
- (3) キーワード (Key words) は和文のキーワードと同様の形式とする。ただしアルファベット順とし、いずれも大文字で始める。

6. 本文

- (1) 本文は、緒言、材料と方法、結果、考察 (または、結果と考察)、謝辞 (必要な場合)、引用文献の順とする。なお、「緒言」の項目は記さない。各項目の見出し字句は行の中央に書く。すべての段落の先頭は1 字あける。
- (2) 各項目中の大見出し、中見出しおよび小見出しは、それぞれ1、2、3、…、(1)、(2)、(3)、…、i)、ii)、iii)、…のように順次区別する。中見出しまでは見出し字句をつけ、改行して文章を書き出す。小見出しは見出し字句をつけ、改行して文章を書くことを原則とするが、見出し字句のあとに「:」をつけて改行しないで文章を続けてもよい。
- (3) 文体ひらがな漢字混じりの横書き口語文とし、できるだけわかりやすい表現にする。
- (4) 術語以外はなるべく常用漢字を用い、かなは現代かなづかいとする。
- (5) 英数字には半角文字を用いる。
- (6) 数字は一般にアラビア数字を用い、漢数字は普通の字句にのみ用い (例: 二三の実例、十徳豆、農林10 号、リン酸三カルシウム)、ローマ数字は番号を示す場合に限る。
- (7) 外国人名は欧文とする。ただし、中国人名などは漢字でもよい。本文中の人名には敬称をつけない。なお、術語になっている外国人名はカタカナ書きとする (例: ケルダール法, ストークスの法則)。
- (8) 外国地名はカタカナを原則とするが、必要に応じて欧文を用いる、または併記する。中国などの地名は漢字でもよい。日本の地名も読み方の周知されていないものはひらがなを併記する。
- (9) 量を表す文字はイタリック体にする (例: $PV=nRT$)。
- (10) 専門用語は原則として文部科学省学術用語審議会編「学術用語集」、および各学協会が責任編集した学術関連用語集による。普通用いられる外国語の術語、物質名などはカタカナで書く。
- (11) 文章中においては、物質名はなるべく化学式を用いないで名称を書く (例: HCl 、 C_2H_5OH と書かないで、塩酸、エタノールと書く)。
- (12) 略字・略号を使うときは、初めにそれが出る箇所で正式の名称とともに示す [例: ペンタクロロフェノール (PCP)、アデノシン三リン酸 (ATP)、陽イオン交換容量 (CEC)]。
- (13) 原則として、動植物の名称はカタカナ書きにし、最初の記載の場合にのみラテン語による学名を付す。学名はイタリック体にする。
- (14) 数量の単位は原則としてSI 単位とする。数値と単位の間には半角スペースを入れる。時間は13 時間6 分のように書き、時刻は13 時6 分または午後1 時6 分のように書く。
- (15) 感謝の言葉 (謝辞) などは本文末尾につける。
- (16) 研究が官公庁、財団、企業などによる研究費補助金、奨励金、助成金などを受けて行われた場合には、その旨を謝辞に付記する。

7. 図・表

- (1) 図・表は、和文では「図 1」、「表 1」、英文では Fig. 1、Table 1 などとする。写真は図に含める。
- (2) 図・表は本文中に入れず、文末に図表をまとめる。
- (3) 投稿の際は JPEG の図表ファイル形式（カラー画像の解像度 350dpi 以上、白黒画像の解像度 200dpi 以上）で投稿する。
- (4) 図・表およびそれらの表題で使うフォントは、和文では MS 明朝、英文では Times New Roman とする。句読点は、和文では全角「、（カンマ）」、「.（ピリオド）」、英文では半角「、（カンマ）」、「.（ピリオド）」とする。
- (5) 表題は、図では図の下部に、表では表の上部にともに中央に配置する。
- (6) 図・表が英文の場合、タイトルおよび図・表中の英文や語句は、最初の文字を大文字とし、以下は小文字とする。
- (7) 図・表で分析結果の有意差検定に関する記述をする場合は、サンプル数は n 、危険率 p とそれぞれイタリックで表記する。

8. 引用文献

- (1) 文献は本文のあとにまとめて著者名のアルファベット順に書く。本文中の引用箇所では、著者名のあとに発表年を括弧書きで添えるか [例：原・土屋 (2007) は...、Bertsch and Seaman (1999) によれば...]、文章の途中または末尾に著者名と発表年を括弧書きで入れる [例：... が明らかにされている (Kookana et al., 1994; 笛木ら, 2007)]。特許は、発明者(あるいは出願人) (発行年) 発明の名称、特許文献の番号を記載する。未発表・未受理のもの、私信は引用文献としては記載しない。
- (2) 和文誌の略名は農学進歩年報の用例により、欧文誌の略記は Chemical Abstracts による。
- (3) 書き方の様式は次の例による。

雑誌

藤川智紀・高松利恵子・中村真人・宮崎毅 2007. 農地から大気への二酸化炭素ガス発生量の変動性とその評価. 土肥誌, 78, 487-495.

Panno, S.V., Hackley, K.C., Kelly, W.R., and Hwang, H. 2006. Isotopic evidence of nitrate sources and denitrification in the Mississippi River, Illinois. J. Environ. Qual., 35, 495-504.

逐次刊行物

Dahlgren, R.A., Saigusa, M., and Ugolini, F.C. 2004. The nature, properties and management of volcanic soils. Adv. Agron., 82, 113-182.

単刊書の章

松森堅治 2005. 地理情報システムを用いた窒素負荷予測モデル. 波多野隆介・犬伏和之編著・環境負荷を予測する, p. 60-79. 博友社, 東京.

Roberts, D., Scheinost, A.C., and Sparks, D.L. 2003. Zinc speciation in contaminated soils combining direct and indirect characterization methods. In H.M. Selim and W.L. Kingery (ed.) Geochemical and hydrological reactivity of heavy metals in soils, p. 187-227. Lewis Publ., Boca Raton.

単刊書 (引用ページを示す場合)

西尾道徳 2005. 農業と環境汚染, p. 148. 農文協, 東京.

Kyuma, K. 2004. Paddy soil science, p. 66. Kyoto Univ. Press, Kyoto.

ウェブ情報

野菜茶業研究所 2006. 野菜の硝酸イオン低減化マニュアル.

<http://vegetea.naro.affrc.go.jp/joho/manual/shousan/index.html> (2020 年 10 月 4 日閲覧)

特許

鎌田淳・丸岡久仁雄・畑克利・浅野智孝・池田隆夫・東野信行・飯塚美由紀・富樫直人 2010. 有機肥料およびその製造方法, 特開 2010-241637 (発明者が 3 名以上の場合は省略も可)

9. 会誌に掲載する PDF ファイルの作成に関して

査読が終了し受理された原稿に関しては、指摘事項の修正等が終わった場合、その PDF 版を作成し、編集委員会へ送付する。レイアウトは著者がとくに希望する以外は会誌原稿例に準拠する。

なお、基本的な様式は以下とする。

(1) 表題、著者名、所属機関・所在地、要旨、キーワードは会誌原稿例に準拠し 1 段構成とし、1 行あたりの文字数は 50 字を上限とする。なお、行数について上限は設けない。

(2) 本文以下も会誌原稿例に準拠し 1 段構成とし、1 行あたり 50 文字を上限とする。また、本文以下の 1 ページあたりの行数は 51 行を上限とする。

付表

SI 単位			倍数に関する接頭語		
量	名 称	単位記号	倍 数	名 称	記 号
長 さ	メートル	m	10 ¹⁸	エクサ (exa)	E
質 量	キログラム	kg	10 ¹⁵	ペタ (peta)	P
時 間	秒	s	10 ¹²	テラ (tera)	T
電 流	アンペア	A	10 ⁹	ギガ (giga)	G
温 度	ケルビン	K	10 ⁶	メガ (mega)	M
物質質量	モル	mol	10 ³	キロ (kilo)	k
光 度	カンデラ	cd	10 ²	ヘクト (hecto)	h
平面角	ラジアン	rad*	10	デカ (deca)	da
立体角	ステラジアン	sr*	10 ⁻¹	デシ (deci)	d
*補助単位			10 ⁻²	センチ (centi)	c
SI 単位と併用される単位			10 ⁻³	ミリ (milli)	m
量	単 位 (記号)		10 ⁻⁶	マイクロ (micro)	μ
時 間	分 (min), 時 (h), 日 (d), 年 (yr)		10 ⁻⁹	ナノ (nano)	n
平面角	度 (°), 分 (′), 秒 (″)		10 ⁻¹²	ピコ (pico)	p
体 積	リットル (L)		10 ⁻¹⁵	フェムト (femt)	f
質 量	トン (t)		10 ⁻¹⁸	アト (atto)	a
面 積	アール (a)				

固有の名称を持つ組立単位の例

量	名 称	記 号	定 義
周 波 数	ヘルツ (hertz)	Hz	s ⁻¹
力	ニュートン (newton)	N	kg ms ⁻²
圧 力	パスカル (pascal)	Pa	Nm ⁻²
エネルギー	ジュール (joule)	J	Nm
仕 事 率	ワット (watt)	W	Js ⁻¹
電 圧	ボルト (volt)	V	WA ⁻¹
電気抵抗	オーム (ohm)	Ω	VA ⁻¹
温 度	セルシウス度 (degree Celcius)	°C	°C = K - 273.15
放 射 能	ベクレル (becquerel)	Bq	s ⁻¹
	キュリー (curie)	Ci	s ⁻¹
濃 度	モル濃度 (molar)	M	mol L ⁻¹

作物学分野で使われる測定量の表示法の例

量	表 示 法
収 量	[P] g m ⁻²
	[A] kg ha ⁻¹ , Mg ha ⁻¹ , t ha ⁻¹
葉面積比率	m ² kg ⁻¹
施 肥 量	[P] g m ⁻²
	[A] kg ha ⁻¹
植物体水分含量	[P] g kg ⁻¹
	[A] %
土壌水分含量	[P] kg kg ⁻¹ , m ³ m ⁻³
光エネルギー強度	W m ⁻² , J m ⁻² s ⁻¹
光量子密度 (光合成有効放射速度)	μ mol m ⁻² s ⁻¹
光合成, 呼吸速度	[P] μ mol m ⁻² s ⁻¹
	[A] mg dm ⁻² h ⁻¹ , mg m ⁻² s ⁻¹
蒸 散 速 度	[P] g m ⁻² s ⁻¹
	[A] g dm ⁻² h ⁻¹

注) [P] は望ましい表示法, [A] は許容されるべき表示法を示す.

復興農学会 会誌原稿例

2020年10月5日 制定

1行目に記載：■原著論文（報文）←「■原著論文（報文）」「■原著論文（ノート）」「■総説」「■解説」「■オピニオン」「■現場からの報告」「■ニュース」「■資料」「■その他」の区別を記入（10.5pt MSゴシックで左寄せ）

原稿作成要領（和文）の概略および作成見本

↑表題は 16pt, 折り返したらセンタリング

←副題は 10.5pt, 副題の左右にハイフンなどは記さない

1行あける

Guidelines for Preparing Manuscripts

↑英文表題は 10.5pt, 折り返したらセンタリング

←英文副題は 9pt, 表題も副題も頭は大文字（前置詞等を除く）

1行あける

農村 太郎¹ 計画 花子^{2*} Robert BROWN³ ←10.5ptTaro NOUSON¹ Hanako KEIKAKU^{2*} Robert BROWN³ ←9pt

要旨：茨城県産米は従来より、整粒歩合、千粒重、粒厚、1等米比率が低いことが指摘され、改善が要望されていた。そして、茨城県等では2004年から「買ってもらえる米作り」運動（以下「運動」）を展開している。本研究では、…

および食味関連形質は、おおむね良好であったと考えられた。

キーワード：アミロース含有率、コシヒカリ、千粒重、タンパク質含有率、粒厚。

Abstract: We investigated some palatability properties of Ibaraki rice cv. Koshihikari, specially examining the correlation of palatability with grain weight and thickness. We investigated the rice from …

of Ibaraki prefecture of 2005 used in this study seemed to have a high palatability.

Key words: 100-grain weight, Amylose content, Brown rice thickness, Koshihikari, Protein content.

緒言

茨城県の稲作は、作付面積が全国で第6位〔78300ha（2005年）〕、生産量が全国で第3位〔1204億円（2003年）〕であり、県農業生産額に占める割合は29%にものぼっている（茨城県農林水産部 2005a）。しかし、…

材料と方法

茨城県内各地で品種コシヒカリ…

¹△△県整備部都市計画課 ²〇〇大学工学部 ³College of Agriculture, University of Kaigai

¹ Maintenance Division City Planning Section, Sankaku Prefectural Government ² Faculty of Engineering, Marumaru University ³ College of Agriculture, University of Kaigai

Corresponding Author*: hanako_keikaku@eng.marumaru.ac.jp

←著者所属は、最下行にテキストボックスを置き、その中に表を組んで罫線を上だけに設置。本文から1mm以上空ける。両端前えで8pt、行間は固定値11pt。和文と英文の間で改行。英語表記は斜体とする。なお、外国語圏に所属している場合は和文所属部分を外国語で記述してもよい。改行後、コレスポンディング・オーサーのメールアドレス（投稿後、数年間は使い続けられるもの）を記述する。すべて半角で、コロン（:）のあとに半角スペースを挿入する。ハイパーリンクにしないこと。

年 月 日受理。

結果

考察

謝辭

引用文献

鎌田淳・丸岡久仁雄・畑克利・浅野智孝・池田隆夫・東野信行・飯塚美由紀・富樫直人 2010. 有機肥料およびその製造方法, 特開 2010-241637 (発明者が 3 名以上の場合は省略可)

表1 水稻品種コシヒカリにおける登熟期における気温の差異が穂の諸形質におよぼす影響.

品種	登熟期の気温	穂重 (g)	登熟歩合 (%)	玄米1粒重 (mg)
コシヒカリ	環境温度	2.7	90.0	22.0
	高温	2.5 ns	82.6 ***	19.9 *
キヌヒカリ	環境温度	2.8	88.5	21.1
	高温	1.9 ***	57.9 ***	13.6 ***

*, *** : 環境温度区との比較で1, 0.1%水準で有意差あり. ns : 有意差なし.

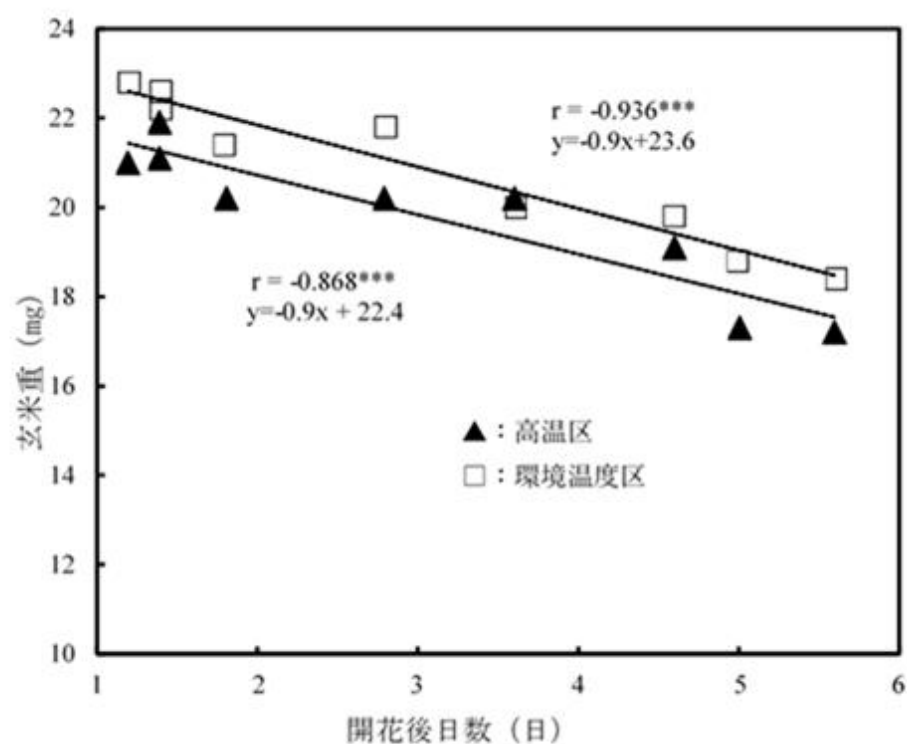


図1 水稻品種コシヒカリにおける登熟期における気温の差異が開花後日数と玄米重との関係.

*** : 0.1%水準で有意.

復興農学会 役員

2025 年 4 月 8 日（火）幹事会確認

幹事	会長	溝口 勝（東京大学）	（第 6 条第 1 項・第 2 項）
	副会長	新田 洋司（福島大学） 登尾 浩助（明治大学）	（第 6 条第 1 項・第 2 項）
		（幹事長）新田 洋司（福島大学）	（第 6 条第 1 項・第 4 項）
	学会誌担当	内田 修司（福島工業高等専門学校）（主任） 杉野 弘明（山口大学） 安達 俊輔（東京農工大学） Djedidi Salem（福島大学）	機関誌編集
	企画担当	石井 秀樹（福島大学）（主任） Djedidi Salem（福島大学） 横山 正（福島大学） 佐伯 爽（東海大学）	シンポジウム・講演会・研究例会の企画
	渉外担当	登尾 浩助（明治大学）	他学会・自治体・会社・団体等との連携
	教育研究資料担当	杉野 弘明（山口大学）（主任） 大川 泰一郎（東京農工大学）	成果・資料の収集・共有化
監事		内田 修司（福島工業高等専門学校） 生源寺 真一（日本農業研究所）	（第 6 条第 1 項・第 5 項）
事務局員		（今後検討）	
アドバイザーボード		（今後検討）	

復興農学会誌 (ISSN 2758-1160)

第6巻 第2号 2026年7月31日発行

編集兼発行代表者

福島県いわき市平上荒川字長尾30

福島工業高等専門学校 化学・バイオ工学科 内田 修司

発行所

〒960-1296 福島県福島市金谷川1番地 福島大学食農学類内
復興農学会

電話：024-548-8364

<http://fukkou-nougaku.com/>

食と農

被災した地域の現状を発信し、力強く生きる人々の今を伝え、
農業再生・担い手の育成・大学・高専の共同開発を通して、
未来をみつめた農業・地域の復興を目指します。

復興農学会

<http://fukkou-nougaku.com/>